

京都大学理学研究科・理学部数学教室

同窓会誌 創刊号

京大数学同窓会

2017年8月25日



数学同窓会

巻頭言

同窓会誌創刊号をお届けします。

京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会は2015年6月6日に設立されました。その折に「同窓会 設立記念誌」を発行いたしました。また、2016年8月25日には「同窓会設立報告号」を発行いたしました。これらの段階では編集規則も編集委員会も存在しませんでした。2016年8月27日に行われた役員会で同窓会誌編集規則が正式に制定されました。これでようやく形が整ったことになり、今回正式に同窓会誌創刊号の発刊に至りました。ただ、未だに名称が定まっておりません。親しみやすい、愛称のようなものがあれば大変良いと思います。会員の皆様からご提案があれば広く受け付けたいと思います。同窓会の事務局に皆様のアイデアをお寄せください。規則の制定とともに、編集委員会のメンバーも決まりました。編集委員長は編集規則に広報担当の役員がなるということになっていますので、私、重川が担当させていただくことになりました。力不足ではありますが、出来るだけの努力をしていきたいと思っています。また、副委員長には井川満氏、編集委員として岸本展氏、田中紀子氏が当たることになりました。編集委員全員で、この同窓会誌を少しでも良いものにしていきたいと思っています。

さて、今まで総会を2回開催いたしました。その折に京大数学同窓会にゆかりのある方を招いて講演会を開催いたしました。設立総会の折には、野呂順一氏、森重文氏を講師に迎え、その講演内容は「同窓会設立報告号」に収録されています。第2回の総会の折の講演会には広中平祐氏を講師に迎えることが出来ました。このように各界の著名な方を講演者として迎えることができ、設立したばかりの同窓会としては、力強い後押しを頂いた気がいたします。今回の同窓会誌には、この広中氏の講演記録も収録されています。戦時中の話から始まる、大変面白い話ですので、皆さん是非お読み下さい。三木氏、松本氏には連載の形で、今回も登場していただいています。

数学教室内では、年度末に卒業式を行っていますが、京大数学同窓会はそのお手伝いをしています。実態を言えば、同窓会が主導となって、理学部事務で形式的に手渡されていた卒業証書の授与を、教室として行うよう働きかけた、ということです。これが2年前の話です。そして、今回の同窓会誌では、その卒業生の中から何名かの方に文章を寄せていただきました。数学教室を卒業して、新たに同窓生になられた方々です。今、の人たちの言葉といえると思います。この同窓会誌には、過去を語る言葉があり、そして今を語る言葉もあることとなります。それは、同窓会という組織を通して、過去と現在とが繋がっているという象徴ではないでしょうか。同窓会というものは、そうした世代を超えての人と人との交流の場を与えるということが重要な存在意義だと思います。そのための手助けが少しでも出来ればと、我々も頑張っていきたいと思っています。皆様のご協力を今後ともよろしくお願いいたします。

京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会
同窓会誌編集委員長 重川 一郎

目 次

巻頭言 重川一郎	i
目次	ii
同窓会会則・運用細則・同窓会誌編集規則	1
2016年11月19日行事報告	4
総会議事録	5
講演記録	
「数学者の素願から終活まで」 広中平祐	9
懇親会報告	
スピーチ 「思いもしなかった市会議長に」 能見勇八郎	33
報告「数学教室の近況」 専攻長 山口孝男	35
学位記授与式	37
学部卒業生・修士課程修了者名簿	38
修士学位記授与式	
「修士課程卒業式祝辞」 専攻主任 雪江明彦	39
学士学位記授与式式辞	
「大学で数学を学ぶということ」 専攻長代理 坂上貴之	40
連載 私の学生時代3	
「大学院生の頃」 三木良一	42
「1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私（3）」 松本和一郎	51
退職・就任に際して	
「追想」 上田哲生	59
「ごあいさつ」 日野正訓	64
卒業・修了に際して	
「楽しい授業」 諸山将梧	66
「数学と私」 川口澄恵	67
寄付者一覧（2016年7月1日から2017年6月30日まで）	69
編集後記	70

京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会会則

2015年6月6日 設立総会において制定

2016年11月19日 総会において改訂

第1条 本会は京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会と称する。略称を京大数学同窓会とする。

第2条 本会は会員相互の親睦と連絡を図り、あわせて京都大学理学研究科・理学部数学教室(以下数学教室と呼ぶ)の発展に協力することを目的とする。

第3条 本会は、次の会員によって構成される。

1 正会員

- (i) 京都帝国大学理学部数学科または京都大学理学部数学科を卒業した者。
- (ii) 京都大学理学部を、数学を主として修めて卒業した者。
- (iii) 京都大学理学部を、数理解析系に登録して卒業した者。
- (iv) 京都大学理学部数理解析系に登録し、飛び入学による大学院進学によって中途退学した者。
- (v) 京都大学理学研究科数学専攻、数理解析専攻または数学・数理解析専攻を修了した者。
- (vi) 京都大学学位規則第3条の定めにより、数学専攻、数理解析専攻または数学・数理解析専攻の教授の審査により博士の学位を受けたもので、役員会が認めた者。
- (vii) 上記の項目に該当しない京都大学卒業生で、本会に入会を希望し、かつ役員会が上記のいずれかの項目に準ずると認めた者。

2 準会員 京都大学理学部数理解析系在学生、京都大学大学院理学研究科数学・数理解析専攻の学生。

3 特別会員

- (i) 数学教室および数理解析研究所の現および元教職員で、役員会が認めた者。
- (ii) 数学教室と特別の関係がある者で、役員会が認めた者。

第4条 会員は希望すれば役員会の議を経て退会することができる。

第5条 本会は、総会の開催、名簿などの管理、およびその他の必要な事項を行う。総会は定期総会および臨時総会とし、定期総会は原則として毎年1回開催する。

第6条 本会の経費は、正会員の会費および寄付によって充てる。

第7条 本会には次の役員を置く。

- 1 会長 1名
- 2 副会長 1名
- 3 監査役 2名

- 4 常任幹事 若干名
- 5 学年幹事

第8条 1 会長、副会長、常任幹事、監査役は、総会において選出する。
2 学年幹事は原則として各年次の学部卒業生から1名を会長が委託する。
3 常任幹事は学年幹事を兼ねることができる。
4 会長、副会長、および常任幹事は監査役を兼ねることができない。

第9条 1 会長は、本会を代表し、会務を整理統括する。
2 副会長は会長を補佐し、会長に事故のある場合は会長を代理する。
3 常任幹事は会長、副会長を補佐して会務を執行し、事務局を運営する。また、会長は常任幹事の中から、書記担当、経理担当、広報担当を指名する。
4 書記担当者は本会の活動を記録し、それを保管する。
5 経理担当者は本会の金品の出納を記録し、管理する。
6 広報担当者は本会の活動を会員および関係する人々や組織に報せる。
7 監査役は本会の活動を監督・検査し、会員へ報告する。
8 学年幹事は、常任幹事を助け、主として同学年会員間の連絡を図る。

第10条 役員会は、会長、副会長、常任幹事によって構成し、本会の運営上の必要事項を審議する。

第11条 総会および役員会の議決は、特別に定められた項目以外は、それぞれの出席者の過半数の賛成により決する。ただし、賛否同数の場合は議長の決するところによる。

第12条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第13条 1 総会の決議により支部をおくことができる。
2 支部はその活動を適宜総会で報告しなければならない。

第14条 本会の事務局は数学教室内に置く。

第15条 1 この会則の施行および本会の業務執行に必要な事項は、京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会会則運営細則(以下運営細則という)による。
2 運営細則の制定および改廃は役員会の決議によって定め、会長は総会で報告する。

第16条 この会則の変更は、役員会の議を経て総会出席者の2/3以上の賛成において行う。

以上

京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会会則 の運用細則

2015年6月6日 設立総会において制定

2016年8月27日 役員会にて改訂

1. 会員資格

正会員 (vii) の適用基準

以下に該当する京都大学卒業生が入会を希望した場合は、役員会は入会適否の審査を行う。

- (a) 理学部を「主として数学を修めて」卒業していない者および「数理解科学系」に登録せず理学部を卒業した者であって、数学を中心に学習しており、かつ入会を希望する場合。
- (b) 上の項目に該当しない京都大学卒業生であって、組織の改変、指導教官の異動その他の理由により、課程の履修や研究が実質的に数学教室を中心になされておき、かつ本会への入会を希望した場合。

特別会員 (i)

- (a) 数学教室および数理解析研究所の現および元教授で正会員でない者。
- (b) 上項以外の数学教室および数理解析研究所の現および元教職員で正会員でない者は、在任期間5年以上を目処として役員会で審議する。

2. 年度

本会における年度は、6月1日から5月31日までとする。

3. 総会の開催

総会は定期総会および臨時総会とする。

- (a) 総会の議長および書記は、総会ごとに役員会構成員および監査役以外から選出する。
- (b) 定期総会は毎年11月頃に開催することとし、会長がこれを招集する。
- (c) 臨時総会は会長が必要と認めるとき、または会員の1/10以上の者から会議の目的を示して請求があったとき、会長が招集する。
- (d) 会長は必要な場合は、総会を開く代わりに書面をもって会員の意見を徴することができる。

4. 総会の付議事項

- (a) 会則の変更（出席者の2/3以上の賛成で決定）
- (b) 事業報告および事業計画の承認
- (c) 収支の決算および予算の承認
- (d) 役員を選任
- (e) 会員の除名
- (f) その他本会運営の重要事項

5. 役員を選出

役員は次の各項に規定する推薦候補者およびあらかじめ立候補のあった者のなかから、総会において選任される。

- (a) 会長、副会長、監査役、および次項の1名を除く常任幹事の候補者は役員会が推薦する。
- (b) 数学・数理解析専攻教授会は常任幹事1名を教授のうちより推薦する。
- (c) 会員はいずれの役員にも立候補することができる。立候補しようと思う者は総会の3ヵ月前までに、文書により会長に届け出るものとする。
- (d) 役員に欠員が生じ、会長が必要と認めた場合には、役員会の決議により補充することができる。補充された役員の任期は、前役員の残りの任期とする。

6. 役員会

- (a) 役員会の議長は会長が務める
- (b) 役員会を招集する場合は、開催予定日の1週間前までに、日時、場所、議題を全役員に通知しておかねばならない。
- (c) 役員会は役員（事務局員を除く）の半数の出席をもって成立する。ただし、委任状を認める。

7. 会費

- (a) 会費は役員会の提案に基づき、総会で決める。
- (b) 正会員は会費を払う。
- (c) 本会の設立時においては会費徴収は難しいので、会費徴収は当面の間行わない。その間の本会の運営は寄付金によって行う。

8. 会員の除名

本会の体面を損なった会員は、役員会の決議を経たうえで、総会の2/3以上の賛成によって除名できる。

9. 付則

- (a) 正会員や特別会員を役員会が認定する作業は、本会の発足前においては設立総会準備会が行い、認定すべき候補者一覧を作り、設立総会において報告する。
- (b) 本会の発足後は、総会における議案の提出、役員推薦などの役員会が行うべき役割は、設立総会においては設立総会準備会が果たす。
- (c) 設立総会においては、収支決算の報告その他設立後のみ意味をもつ項目の報告はしなくてよい。

以上

京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会 会誌編集規則

2016年8月27日開催の役員会で制定

- 第1条 この会誌は、京大数学教室同窓会の目的（会則第2条）実現に資するために、本会の活動状況を会員に周知するとともに、会員の当会への要望などを活動に反映させることを目指して刊行する。
- 第2条 本会誌の名称を「……」とする。
- 第3条 本会誌は年1回定期的に発行する。ただし、必要に応じて臨時号を発行する。
- 第4条 本会誌の編集、発行について協議するために、編集委員会を置く。委員は役員会が任命する。
- 第5条 編集委員会には、正副委員長を置く。
2. 委員長は広報担当役員が就く。
 3. 副委員長は委員の互選で決める。
 4. 委員長は、委員会を招集し、議事を整理し、委員会を代表する。
 5. 委員長に事故があるときは、副委員長が委員長の職務を行う。
- 第6条 編集委員会は編集の基本方針を定め、役員会の了承をえなければならない。
- 第7条 会誌は、送付先の分かっている会員、その他必要と認める人に配布する。
- 第8条 発行のための事務は、同窓会事務局が処理する。
- 第9条 この規則は、編集委員会の議決と、役員会の了承を得て変更できる。

以上

編集委員

重川一郎（編集委員長） 井川満（編集副委員長） 岸本展 田中紀子

2016 年度京大数学同窓会総会行事

2016 年度の同窓会総会行事は、11 月 19 日（土）に下記のように実行された。

総会受付	13:30 ～	理学研究科 6 号館 301 号室
総会	14:00～14:30	同上
講演会	15:00～16:30	理学研究科 6 号館 401 号室
懇親会受付	17:00 ～	北部生協 2 階
懇親会	17:30～20:00	同上

講演会の講師とタイトルは次の通りであった：

講師： 広中 平祐 氏

タイトル：「数学者の素願から終活まで」

本会誌のこの後の部分に

- 総会議事録（含む会計報告書）
- 総会出席者一覧
- 広中氏講演記録
- 懇親会 スピーチ
- 懇親会 専攻長報告「数学教室の現状」

が収録されている。

日時 2016年11月19日(土) 14:00~14:35

場所 理学研究科6号館301号室

出席者 62名(出席者氏名は別紙)

司会の菊地克彦氏によって総会の開始が宣言された。

議長選出

司会者から、運用細則第3条項目(a)により、役員構成員および監査役以外から議長を選ぶことになっている旨の発言があった。会場からの推薦が無かったため、司会者から國府寛司氏を推薦したい旨の提案があった。國府氏を議長としてよいか諮られ、承認された。

総会

1. 書記の選出

議長より、書記に日野正訓氏を推薦したい旨の発言があった。日野氏を書記としてよいか諮られ、承認された。

2. 議事録作成手順

議長より、議事録作成の手順が以下のように提案された。日野氏が総会の議事を記録する。そのあと、議長(國府氏)、書記(日野氏)、書記役員(菊地氏)が、日野氏が取った記録を整理・検討して、議事録(案)を作成する。その案を総会出席者全員に送付する。この議事録(案)に対する意見を出席者より出してもらう。その後、同窓会会長、上記の3名および意見提出者との協議の上で確定させる。以上の手順でよいか諮られ、承認された。

3. 報告

3.1. 井川同窓会副会長より、同窓会設立以降の活動内容について以下の報告がなされた。

(a) 設立準備会の仕事として、同窓会設立の報告と共に冊子(設立準備号)を、連絡先が分かり総会に出席されなかった方に送付することを決めた。

(b) 役員会を2回開催した(平成27年8月1日および平成28年8月27日)。議論された主なことは以下の通りである。

- 学部卒業生と修士修了生の学位記授与式を数学教室で開催することにした。(同窓会存在を周知するという目的もある。これまでは、学生は「みやこめっせ」で開催される式典に出席し、事務室で学位記を受け取るのみであった。)
- 総会の準備
 - ・ 総会に提案する会則改正案の作成
 - ・ 運用細則の変更を決定(配布資料を参照)
 - * 役員会成立の条件を設定
 - 過半数の出席を成立条件とし、委任状を認める。

(そのために議案を1週間まえに送付することにした。)

* 定期総会の時期の設定 11月中旬ごろ

* 年度の始まりの日の変更

年度初めを6月1日とし、現在の役員の任期を2018年5月末までとする。

(学位記授与式を開催する関係で、5月末を年度終わりとするほうが都合が良いため。)

- 同窓会誌編集規則の制定
同窓会の目的に添った正式の会誌とするため、配布資料のように規則を定めた。

(c) 役員会の決定に従って以下を実施した。

- 学位記授与式を行った。
- 同窓会設立の報告と共に冊子(設立準備号)を、連絡先が分かり総会に出席されなかった方(約500名)に送付した。

3.2. 会計報告

吉川謙一会計担当役員から配布資料に基づいた会計報告があり、中山素生監査役より報告書に相違ない旨の報告があった。この件に関して承認された。

4. 議事

(a) 同窓会会則の変更について

第5条「役員の選出」項目(a) そのほかの「監査」を全て「監査役」に変更したい旨の提案が井川副会長からあり、承認された。

(b) 運営細則に関する質疑応答

- 運用細則中の第1条「会員資格」の記述と第6条「役員会」の構成について質問があり、井川副会長より説明がなされた。また、第6条項目(a)において文末の句点を追加すること、および項目(c)の「半数」を「過半数」に変更するよう提案が出され、これらの変更について承認された。
- 会費徴収の手続きについて質問があり、井川副会長より回答があった。
- 会則の中に寄付の項目を設定してはどうかという意見があり、井川副会長から役員会で検討する旨の回答があった。

5. その他

井川副会長から以下の発言があった。

(a) 活動についての提言を頂きたい。特に、以下の項目について。

- ・ 総会行事のもちかたについて
- ・ 同窓会誌の編集に関して

(b) 支部を作ることを考えたい。

以上をもって、総会は閉会となった。

以上

平成27年度 理学研究科・理学部数学教室同窓会 会計報告

(平成27年7月9日～平成28年4月30日)

収 入			
費目	内訳	金額(円)	備考
繰越	現金繰越(収支簿)	4,933	
	設立総会残金振込(井川先生口座から)	191,719	
利子	利子(2015.10.1、2016.4.1付)	14	
寄付	授与式にて20名分	49,000	
徴収	授与式懇親会にて写真送付代金として	17,500	
雑収入	授与式懇親会飲料 数学教室にて買い取り	1,542	数学教室懇親会経費
合 計		264,708	(A)

支 出			
費目	内訳	金額(円)	備考
事務費	用紙・封筒・振込手数料等	7,517	
通信費	切手・送料	3,880	
	記念誌発送料	86,935	
授与式懇親会 (計67,562円)	記念品クリアファイル	17,820	
	懇親会飲食関係	35,635	
	写真現像・送付	10,867	
	授与式花	3,240	
合 計		165,894	(B)

差し引き			
区分	内訳	金額(円)	備考
収支差額	(A-B)	98,814	
平成28年度会計に繰越		98,814	

上記の通り報告いたします。

理学研究科・理学部数学教室同窓会

平成28年5月19日

会計 篠崎 由加里

監査の結果、上記報告書に相違ないことを報告いたします。

平成28年5月19日

中山 素生



平成28年5月19日

稲生 悠行



2016年11月19日第2回総会参加者御氏名(敬称略・順不同)

赤堀 喜信	安福 良直	井川 満	池田 健司	池野 裕介
池田 保	泉 脩藏	伊藤 祐志	植田 隆巳	上田 哲生
大塚 香代	大塚 研一	岡 宏枝	小川 明彦	小川 亘
蟹江 幸博	亀井 清	亀井 真人	川口 京子	菊地 克彦
木坂 正史	岸本 展	桑門正美	國府 寛司	佐井 義和
重川 一郎	宍倉 光広	高島 克幸	高橋 元	辰馬 伸彦
玉城 真巳	塚本 千秋	土川 眞夫	中山 素生	長井 英生
能見 勇八郎	蓮井 敏	畑 聡	日野 正訓	平井 武
平賀 郁	平野 徹	藤原 宏志	米谷 文男	松本 和一郎
松森 至宏	三木 良一	三輪 雅	向井 茂	望月 拓郎
森住 弘	森本 芳則	山岸 義和	山口 睦	山本 泉二
吉岡 嘉暁	吉川 謙一	渡井 啓夫	渡辺 信三	熊谷 隆
野村 憲司	松本 雅博			

数学者の素願から終活まで

広中 平祐

1954年（昭和29年）京都大学理学部数学科卒業
数理科学振興会 代表
1970年（昭和45年）フィールズ賞受賞
1975年（昭和50年）文化勲章受章



2016年11月19日 京都大学理学研究科6号館401号室にて
河野裕明氏撮影

数学者の素願から終活まで¹

1 はじめに

1.1 生命あるもの必ず死す

僕は85歳になって、もうすぐ86歳になりますけど、皆もその年齢になった時には分ると思いますけど、つまらないことをやりたくないのですよ（笑い）²。ご存知のように「生命ある者は必ず死す」と、死ぬことは決まっていますのです。だから、死を予定した上で、あと5年か、だけど2年か、3年か、ひょっとしたら10年かも知れないけど、死ぬことは決まっている訳です。それをですね、人を喜ばすためにね、あるいは人から感心してもらうようなことをやりたくはないのです。考えてもみなさい、まあ、そんなこと若い頃は苦労して、早く助教授から教授になりたいと思ったこともある。今はそんなことないじゃないですか。85歳以上の人手を挙げてみて（笑い）。今でもそういうの欲しいですか、それで苦労したいですか。余程の変人でないとしません（笑い）。

1.2 人生は単純ではない

僕が尊敬していた小平さんに、色々お世話にもなった、指導も受けた。指導というのは数学的にもあったんだけど、“人生アメリカでどういう風に暮らすか”について色々指導を受けたこともある。それから伊藤清さんも不思議に丁度 MIT の教授をしておられて、僕が Harvard の学生になった頃にいろんなこと教えてもらいました。「どんな研究をしたらいいだろう」と言ったら、「とにかく何でも良いから自分に出来そうなことと、それからもう一つは人がやっていないことをやりなさい。そうしたら貴方だつて何とかなるだろう」と。その通りだと思いました。

僕の話聞いて、少し賢くなるとか、そんなこと考えているのは、よっぽど馬鹿ですよ。そんな単純なものじゃないんです、人生というのは。

何ていうのかな、人の話に不思議に影響されることがあります。或る時に、何だこんなもの聞きたくもないと思ったことを、数年経って何であの時にチャント聞いておかなかつたんだろと。

僕の専門は代数幾何なんですけど、僕の教授室に André Weil という人がやってきて、「是非、標数0で終わらないで標数 p までやってくれ」。なんでそんなことを言うんだろと思って、何か色々屁理屈言っていたけれども、何いってやんでえと思ったんですけど、今思い出そうとして、あれを聞いておけば良かったな、もう一寸耳を傾けておれば良かったな、一寸深い意味があったかも知れないと。

それからまたしばらくすると、Gel'fand というロシアの教授なんだけど、もう晩年にアメリカにやってきて、「僕に会って話したい」、「いいですよ」といって話した。僕は特異点解消というのをやっていた訳だから、「標数 p の特異点の解

¹この講演記録は、編集部が録音を文字化し、広中氏が整理して作成されたものである。

²（笑い）は、聴衆が大きく笑ったことを指す。

消, あなたやってください」,「実を言うと,それが結構役に立つのです」と言う訳です. その頃の僕はわざわざ訪問して人の話を聞いている暇はなかったんです. それに Abhyankar がやれば良い, 別にも標数 p の問題を熱心にやっている人はいる. 僕の出番ではないと思っていました. けどこっちがお爺んになった頃にやってみると面白いんですよ. Computer Software を作って根の公式を作成する問題. Hilbert の第 5 問題と関連づける問題. 等々と空想が広がります. それは後で説明しますが, けど彼が何を言おうとしていたかに僕は何で耳を傾けなかったんだろうと思っています. 今は亡くなられた二人の大先生の話の聴いていなかったことを残念に思っています.

2 私の生い立ち

話を変えて, 少し自己紹介します. この写真は何でもないんだけど, このお母さんに抱かれているこの可愛い坊や, 85 年前の僕なんです.



こんなに可愛かったのです, 85 年前は. 85 年と 2, 3 ヶ月かな, それだけ見せといて (笑い).

2.1 遺伝子と環境子

それから, 人間というのは色々な遺伝子をもらって, その中のチャント活躍する遺伝子もあれば, 全くしないのもいて, ある年齢になると死んでいく. 遺伝子だけで決まる訳じゃなくて, 育ち方というか, 育った環境, それから成長してゆく過程でいろんな人に出会って, いろんなこと言われて, あるいは非常に良い環境に恵まれて, あるいは酷い目に遭って, それで学ぶことがある訳です.

だからそういうのを僕は“環境子”と言っているのです. 遺伝子と同じように“環境子”と言うのがあって, それで人間というのは自分の人生を自分なりに作って行くのだと思います. “環境子”について僕言いたいのは, 僕についてですよ,

あんまり僕の話ばかりしていると面白くないと言うだろうけど、何時でも部屋を出て行けばいいです（笑い）。

2.2 中学時代の空襲爆撃の経験

僕の育った時の環境の特徴というのは、中学2年生のときに終戦した訳ですけど、1年生の後半から2年生にかけて光工廠というところで、人間魚雷を造るところで働かされていました。最後には、メチャメチャに爆撃され、僕と一緒に防空壕に入っていた同級生が一人最後には亡くられました、そのときは足を切っただけでしたが。

とにかく敷地から逃げなければいかん、普段練習するわけですよ。空爆のあった時には、サイレンが鳴るわけです。だけど面倒くさいから、山まで走っていかんらんから、どっかに隠れていたりするのです。ところが爆撃された日は何の警報もなかったのに、皆窓から飛び出しました。何故かと言うと高射砲で最初バーンと撃つ訳です。アメリカは、これは賢い、そういう下からの攻撃を最初に完全に潰しちゃうんです。全く下から音はしなくなるけど、上空からだけ音がするのですよね。そして爆弾が来る訳です。爆弾が落ちるとというのは音がするんですね。もうそうなってくると誰も何も言わないのに、皆窓から飛び出して近くの防空壕に入ってしまったものです。

ただ、一寸話が逸れてしまうんですけど、年寄りの、年寄りと言っても皆さんから言ったら50代の人とか、60代の人とかです。聞いとくことは大切です。従わなくてもいいのです、聞くだけで良いのです。それは偶に人生に一度か、二度位ですけど、たまに非常に役に立つのです。僕は、防空壕に入っていて死ななかったのはそのお陰です。

アメリカも終戦間近になると非常に爆撃上手になって、最初にボーンと爆撃する訳です。そこらの建物を全部潰してしまう訳です。直撃を受けたところで上級生、中学の上級生三、四人死んでしまいました、即死です。だけど僕の防空壕は基がガタガタゆれて、もう砂が天井から落ちてきて、砂が一杯になる位だったけど、だけど直撃はなかったんです。助かったんですけど、空襲が終わるわけです。僕なんか逃げようとする訳です、こんな所に居たなら堪らない、そうしようとする「待て」と言われるのです、入口で見ている大人が一人いて、そう言うからしかたがないから待っている。暫くすると物凄い爆撃が有る訳です。まあ逃げなくて良かったと思うんです。それが終わり、また静かになる訳です。それで「もう逃げよう、逃げよう」と言う、「待て！」と言う訳です。それが三度になって、三度目の爆撃の音がしなくなったら「今だ！」と言う訳です。それで僕達は防空壕を飛び出して、とにかく川を渡って逃げようと言って、川を渡ったわけですけど、一人が怪我していたから、しょうがないから本当は放ったらかして逃げたかったんですけど、人間にはそういう場面では何か別の感情が出てきてこいつだけは何とか連れていかなければと思ひ、川を渡った訳です。

川を渡ると病院が有ったんです。そいつ足に怪我してたんで行ったら、医者が居て、医者といっても軍医ですけど、僕をみて、「お前が連れてきた奴よりも、お前の方が震えているではないか」。だって当たり前ですよ、全然怪我してないんですけど、もう怖くって怖くってしょうがない訳です。それで怒鳴りつけら

れて、診てくれるんかと思って待っても、いつかな見てくれない。それでなくても兵隊達が、彼らは表に出て高射砲を撃ったり何だしていたんだと思うんですけど、最後にはアメリカの飛行機の機関銃で直撃に、最後はアメリカの飛行機や飛行兵にとってはもうゲームみたいなものだったのではないかと思います。というのは、地上には何も対抗するものが無いんだから。それで狙い撃ちされていた訳です。そういう日本兵達が山といた訳です。それで軍医が何ていっているかというと、「こいつは死ぬ」、「こいつは死ぬ」、「こつは死ぬ、放っとけ」、「こいつは死ぬ、放っとけ」、「こいつは助かる、やってみろ」と看護婦に言う訳です。本当にギャー、ギャー言ってあばれている負傷兵が目前いるんですよ、それに「こいつは死ぬ」というんです。やはり医者というのは勘がいいのか、見たら分かるらしい。僕等見てたら、あれだけ言っているんだから、まだ元気なのかと思っていたら、大間違いで、助けようとしても助けられない。

とにかくそういう状態で僕達は相手になってないので、しょうがないから駅まで逃げて、もう早く家に帰りたくて、放ったらかして帰ったんだけど、彼も家に帰ったんだけど、破傷風というのになって死んじゃったんです。結局、僕達の防空壕の中で一人だけ死んだ訳です。

2.3 僕の両親

僕のこの写真で、真ん中にいて一寸威張った格好をしているのが僕なんです。



小学校に入って、それまでは学校というところに行っていかなかったんだけど、小学校に入るというので服まで作ってくれて、何か急に賢くなったような気になって真ん中にいるんです。兄貴が二人いたのです、背の高いのが二人立っています。

僕の母は小さい子どもを抱いている。僕の母は結婚した旦那さんが銀行マンだったんだけど、結核を患っていた。それでも僕の母は妊娠しました。よく結核移らなかったと僕感心するんです。それで、おじいさん、おばあさんのところへ

帰っていった訳です。というのは、あの頃は結核というのは物凄く恐れられていたのです。田舎には火葬場と隣合わせに避療院というのがあって、そこに放り込んでいたのです。医学の事を知っている老人は、あの時代のこと知っているかもしれないけれど。

それで親元に帰ろうと言っても、親元が拒否していたんです。しょうがないからさっきのおばあちゃん、僕のお婆ちゃんとお爺さんが可愛そうだから、僕のお母さんとその結核の旦那さんを山の奥の方で小屋を作って、そこに住まわせていたのです。時々食料を運んでいたんだと思います。

その旦那さんが死んじゃって、それで子供が一人出来たのです。兄貴が一人出来たんですけど、それは「水戸」という名前です。広中ではないのです。そしてもう一方、僕のお母さんのお姉さんは、僕のお父さんと結婚して四人子供を生んでいて、そのうちの二人が男の子で、僕のお父さんは非常に期待して、一番大きな息子を名古屋の専門工業学校に行かして、二番目は専門商業学校に行かしました。態々名古屋まで行かして、これでこの家を継がそうと言っていた訳です。だけどその奥さんが癌で死んじゃうんだけど、その奥さんというのは僕のお母さんのお姉さんだった訳です。僕のお母さんは息子一人を連れて、寡婦となっていたのです。それで僕のお父さんは子供四人いて、それで一人者になっていた訳です。それで、町の人が、「二人とももう相手が死んでいるのだから結婚したらどうや」と言うことで結婚しちゃった訳です。そして、そのお母さんとお父さん二人の間で、十人子供が出来たのです。

医学の人はわかりますか、結婚した旦那さんが結核で死んで、山の奥に隠れていて、それで妊娠までして、結核になっていないんです。その後で、僕の親父と結婚して十人も子供を生んだんです。これ医学的に説明できますか（笑）。だから人間にはやっぱり遺伝子みたいなものがあるって、何かそういう病には強い者もいる訳です。

2.4 兄達の戦死

僕の兄貴、一番上の兄貴は、お父さんの方の兄貴なんだけど、23歳でニューギニアでアメリカと戦って戦死しました。まったくあの頃の話の後から、僕はかなり歳とってからいろんな所で聞きますと、本当に胸糞悪くなります。

アメリカの兵隊の方は文句を言って、「暖かいスープを飲みたい」と言うと、暖かいスープを送っていたのです。日本の方の兵隊は、「武器を送ってくれ、食料を送れ」と言っても、「どっちも無い」と言うのです。それで迎えに来るはずだったのに、それを迎えにも来なかったのです。それで何が来たかと言うと電報、電信です。その電信が「死守しろ」というのです。“死んで守れ”ということです。そんな殺し方をしているのです。だから靖国に僕行く気がしないのです。外国人は行きたくないというのは理由があるのかどうか知らないけれど、僕は日本人として行きたくないです。僕の二番目の兄貴、北京へ行って、負傷して、そして北京の病院に入って、それで22歳で死にました。

あの頃ヤバイと思うのはですね、赤紙が来て軍隊に入ったら訓練もしないで最前線に送ったんです。それで「死守しろ」というのです、その様な話ありますか。昔は二年間位広島島の練兵場というのがあってそこでチャント訓練して、それから

戦地へ出した訳です。訓練もしないでニューギニアまで送っているんです。送り出したのは日本にいた日本人なんです。冗談じゃないですよ、一寸オカシイんじゃないですか。日本人はどうのこうのと言うけど、僕はそのことを考えると、もう本当に胸糞悪いです。

2.5 兄弟が多いのは素晴らしい

いずれにしても僕のところは15人の兄弟が出来ました。15人兄弟、多いというのは良いことです、親にとっては楽です。というのは、親なんか無視して生きてますから。兄弟喧嘩はするけど、妹なんかクラスで苛められたら、兄貴が寄ってたかってそいつに談判に行きます。それで団結心が出る。沢山子供がいた方が親は楽できる、楽なんです。それに子供なんていうのは、余り食べなくても生きています。栄養がどうのこうのと言うけれども、冗談じゃないよ、そんな事言うと、僕達きょうだいは皆馬鹿の筈です。

広中家の兄2人は死んで、僕が中2で長男となったのです。僕の母は「戦死した二人は戦死だからしょうがないが、残った子、戦後生まれた子はどの一人も死なせない」と言っていました。

僕が山口大学の学長になった時、山口市の方がいらっしやって「コマーシャルに出てくれないか」という訳ですよ。「何ですか」といったら、「貴方は兄弟が沢山いて、それで山口大学の学長にもなった。それを宣伝してですね、子供をもっと沢山生みなさい、一人位山口大学の学長に成れるかもしれない」（笑い）。冗談じゃないと言うんだ、僕は断りました。

僕の兄弟というのが15人並ぶ訳ですけど、一番年上の姉は今100歳に近いのですが、まだ生きています。女で生まれて良かったということです、男に生まれたら皆殺されていたかも。余程上手な戦争をすることを知っている人だったら別ですけど。両方に兄貴、二人は戦死したのですけど。僕の父はその時には、ぐったりしてまして、二人の期待していた息子が死んじゃって、戦死したんで、もうがっかりしていた。お陰で、未だ中学生の僕は何になろうとも勝手にしろ、というものなんですね。

2.6 京都大学入学

大学に行かんならので京都大学を受けたんです。すると、偶然通った訳だけ。父は5000円くれてですね、あの頃の5000円で、親父随分頑張ったんだろうと思うけど、「これで大学卒業して帰れ」という訳ですけど、5000円一年で使ってしまいました。月謝も払うんだから。

僕の弟も、信州大学へ行っただけですけど、それから下の弟は大学なしです。僕の弟がお父さんに手紙を出して、「これでは食べる物もたべられないし、大変だよ」と言ったら、お金送ってくれるかと思うと、お金送る代わりに手紙が来て、手紙に「人間は食べるためだけに生きてるんじゃない」というような詩を作って送ってくれたというのです。「それじゃ食べられないよ」と言ったら、僕もそのころ京都大学で少しアルバイトで稼げるようになったから、少しだけは小遣いを送ってやって、死んでもらっちゃ困るからね。

それから僕は親父が商売人だったし、そういうアルバイトなんかでも儲ける術は身に着けていたんで、非常に助かって、京都大学の大学院に入った頃には、アルバイトだけで助教授位の給料を取って父に時々小遣いを出したりしました、いづれにしても弟がいますから、そういう時代ですね。

2.7 入試の成績は悪くても才能はつくれる

僕は京都大学で育英会の方に応募したんです、お金がないから、そしたら審査委員の教授達並んでいて、「受験の時の成績が問題だなあ」とかいう訳です。僕は「世の中にはね、どんなところにも才能の種は有る筈です。僕の町からですね、大学に行った人は二人しか居ないんだ。一人は神主の息子、もう一人はお医者さんの息子、あとは皆行ってないんですよ」。それに僕の時代になって、戦後ですから、急に国立大学が沢山出来た時代ですが、皆喜んで、田舎者でも大卒になれるとみんな沸いていたのです。あれは日本の戦後の復興に非常に役に立ったと思うのです。今だったら、大学の質がどうのこうのとか、ケチな優劣で大学を語る人がいるけど、あのころ大卒になれるというだけで、ビックリして人生観まで変った若者がたくさん出てきたのです。田舎では大きな転換期だったのです。

とにかく僕は、僕の高校から二人だけ帝大に、元帝大に合格したんです、それも京都大学です。生徒は沢山いるんだけど、あのころ子供が多いから沢山あった訳だけど、「二人だけ入ったんですよ。そのこと考えて下さいよ。才能は有るんですよ。成績は悪いだけの話で、才能は有るんですよ」(笑い)。そしたら審査している先生方が笑い出して「まあ結構です」と。結果的には僕も育英会の奨学金を貰えたんです。あの時、年に一万円貰えたんです、これは凄いお金だったです。非常に助かりました。後で返しました。

3 数学者の素願

3.1 秋月先生と代数幾何グループ

偶然と言うのは、いろんな点で出てきていいもんです。悪いときも有るんだけど、京都大学の学生になってから非常に運が良かったと思うのは、秋月先生が居て、覚えている人が居るかもしれないけど、秋月先生というのは怖いような先生で、ドアが開かないと蹴飛ばして入るような先生でした。だけど学問に対して非常な情熱を持った人です。そして、とにかく人材だったら誰でもというようなところが有って、東京大学から井草準一を京大に呼んで助教授にして、それから名古屋大学から永田雅宜を講師に呼んで、そして自分の直弟子も居たんですけど、それはアメリカに送ったりして、そして何か京都に良い雰囲気を作ろうとしてました。

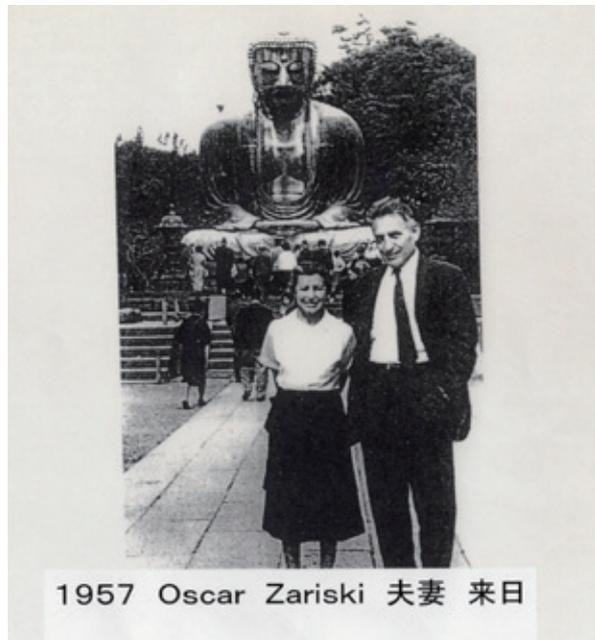
あの頃、それまで京都大学の数学教室の、数学科の教授は三人しか居なかったのです。だから結構秋月さんは苦勞して、岡潔を教授にしようと思って頑張ったりしたらしい。それで態々岡潔の連続講義などをやりました。僕もその講義を聞きました。やっぱり、あの先生は一寸普通の人とは違うところがあって、何か教授になれなかったらしい。それでも秋月さん苦勞して、奈良女子大学の教授になんとかした訳です。色々問題があったらしいんですけど。

秋月さんというのは人間的に一寸怖い位素晴らしい人だったと思います。あの頃の大学の教授は皆、真面目で賢い人で、面白くない先生ばかりだったけど、秋月先生だけは一寸違たんです。あの頃を知っている人はどんな先生であったかは憶えていると思いますけど、代数幾何のグループを作ったんです。

そこに僕は大学三年のとき、その秋月グループに入って、僕一番若い生徒でした。何ていうかな、例えば井草さんは既に居なくなっていた。他に偉い人も居たんだけど、アメリカに行ってしまった。松阪という人だけど、アメリカの大学に行っちゃったと言う様な状態だった。中井さんと言って後に阪大の教授になった人と、それから西さんにとってもう少し若い人で助手だったか知らないが、色々親切に指導してくれました。そのお陰で色んな良いことがあったんです、僕には想像をこえた幸運。

3.2 Oscar Zariski との出会い

この写真に出てくるのは Oscar Zariski といって Harvard の教授なんです。その奥さん、ヨーレー (Yole) といって、この写真では見えないけど、もう少し若い頃は非常に別嬪さんで、イタリー人です。Oscar Zariski はロシアからイタリーの時代を経て Jole と共に米国にやって来たんです。彼が3ヶ月京都大学で講義をしてくれた訳です。秋月先生の努力で京都大学に来てくれた訳です。



Zariski 教授が、「お前何の研究してんだ」。大学の3年生でしたけど、何とかして説明しようとして行っても、英会話が上手に出来ない。それで、しかめっ面して聞いている訳です。まっ、方程式位は書けますからね。そしたら中井さん達先輩が「広中が言おうとしているのはこういうことだ」なんて旨いこと説明して下さるんです。永田さんも大変協力してくれて、そしてお陰さまで Zariski さんが、「広中、Harvard へ行って勉強してみないか」とおっしゃる訳です。「勿論行きますよ」。だけど、行くといっても1ドル360円の時代で、しかも一人15,000円だったかそれ以上にドルを買うことは許されてない。特別のお金持はヤミで買うことが出来たそうだが、想定外の話。そういう時代だった訳です。Harvard なんかにには行けないです。もう兄貴は二人戦死してるし、それに僕の下が8人居る訳ですから。

3.3 Fulbright を受けてアメリカへ

それで、不可能の話と思っていたのだけど、「Fulbright 受けてみる」という。Fulbright 受けてみたけど、Fulbright にまた英会話のテストがあるんです。最初に会話のテスト。最初の質問は“What is your hobby?” というんです。僕は大学三年までに英語の論文をいくつか読んでました。だけど“hobby”という言葉は僕の頭には全く無かったんですよ（笑い）。だから答えようがなくて、僕は黙っていたのです。「これで面接終了」って言われたので、僕はもう良いや、何もアメリカへ行かなければならない理由は無い、日本に残っていても大学の先生になれるかどうか分からないけれど、高校の先生くらいには成れるだろう。その位の実力はあると思っていました。僕は若いときから、長男でしたからかなり自惚れが強い。何故かと言うと兄弟を引っぱっていくという優越感というのは大切です。

それで米国行の話は頭から諦めていたのですが、Fulbright 委員会から手紙が来て、本当は落第なんだけど、ひょっとしたら数学の力は有るのかも知れない、だから一つ条件付で採用してやろう。あの頃、数学科で Fulbright を受ける人の数は少なかったんです。だから一人位入れてやろうという気持ちが有ったんかも知れません。とにかく一ヶ月半だったか二ヶ月だったか忘れたけど、ネイティブなアメリカンに就いて会話の練習をしてその証明書をもらってきたら、Fulbright を出すとおっしゃったんです。

それで僕は猛烈にそういう先生を探して、丁度お寺に来てる米国人のお婆あちゃんがいらしゃって、その人が毎日教えてくれました。それでチャント証明書をもらって、Fulbright で氷川丸に乗ってアメリカへ行くことが出来た訳です。

ポケットマネーなんて全然無かったです。だけど、Zarski 先生が Fulbright を通ってアメリカへ来れば、Fulbright は旅費を出すだろうから、毎月 400 ドル位の研究費を出してやると言うのです。400 ドルも有ればこんな良い事はないと思っていたのですが、あの当時のアメリカの Harvard 学生の連中から見ると 400 ドルというのは少ない金額でした。僕には偉大な金額でした。

3.4 日本人の凄さ

一つ僕言いたいことがあるんだけど、アメリカとかヨーロッパの秀才達というのは、早く、しかも非常に奇抜な発想で新しいものを発見して、それをドンドン発展させて、それが終わったら止めて、又新しいものを発見する。それを三つやったんが天才だという考えが有るんです。それで今でもそうなんだけど、アメリカなんかで早くノーベル賞もらいたいなんか言う人が、何か発見したら New York Times に電話して、出来たと言う。論文発表するのを待ってはられない、誰よりも先に、と言うところがある訳です。誰よりも先に、人がビックリすることを、要するに先端の先端をと意識があるのです。これはアメリカの、欧米の秀才達の強さでもあるが欠点となるケースも少なからずだと僕は見て来たのです。

日本人は昔からそんなことはないんです。最近の若い人はいつの間にか欧米人に影響をされて、誰よりも早く、誰よりも奇抜な、人がビックリするような最先端の、そういう意識が意外と出はじめて来ているように思うのですが、これは考えてみると、生来の天才はそれでも良いのですが、そうでない人も多い。貴方がた損します。人生というのは長いんです、85まで生きるかも知れないのです。そ

んなことで生命力の無駄使い。僕、断言していいけど、無理をして人生を速める人は80代になった時には後悔します。そのことを今日は説明したくてしょうがないんだけど、僕は冗談言っているのではないのです。

日本人の凄さはですね，“忍耐力”なんです。必ずしも一番にならなくてもいいんです、二番でもいいのです、三番でもいいんです。三番になるということは凄いことじゃないですか。「金メダルでなかった、残念だ」などと言うなって言うんだ。銅メダルでもいいじゃないですか、銅メダルの次だっていいじゃないですか、世界でですよ。素晴らしいことじゃないですか。自分の人生にとっては非常にプラスになる訳だ。人が褒めなくても、自分が自分を褒めることが出来るのです。

日本人の特性を生かすべきです。僕は頭は悪いけど、日本人の特性を生かしたと思うんです。僕は Harvard で30才で数学の博士号を取ったとき、20才で取る奴もいるし、20才でMITの助教授になる奴も居ました。そういう頭が良くて、研究でも成功してる天才も秀才もいる。僕にむかって「お前、見るところ馬鹿には見えないんだけど、何で遅いんだ」と言う。何と言ってやろうかと思って「今まで俺は哲学をやってたんだ」と嘘をついた。だけど僕は違った意味で哲学をしてたと思います。僕のモットーは「天才良し、秀才よし。しかしどん才これまた良し」。それは、日本人の特性ということを考えていたし、それから、“早く”ということは良い事じゃないんだという事を知ってましたから。それは自分の能力も知ってましたから。

岩沢健吉さんが「とにかく人がやっていないことをやりなさいよ」と言っていた。「慌てることはない。競争は無い訳だからじっくりやってやれば良いんだ。そこから面白いものが出てくるかも知れない」、そういう事おっしやたから、僕はそれはそうだなあと思った。

3.5 特異点解消問題

特異点解消というのは Zariski 先生が若いときやってたのです。それでもう諦めていた訳です。3次元までは何とか出来たけど、もう厄介になってきて止めていた訳です、それで誰も手を付けなかった訳だ。これは岩沢さんが言っていた“良いこと”かと思って僕は始めた訳です。それに、特異点というのは至る所にあるんです。人間の顔でも目玉の大きい人がいるとか、小さい人がいるとか、口が小さい人がいるとか、いろんな特徴があります。耳の大きい人は金持ちに成るとかいう説もある。そんなことはどうでも良いんです。風船みたいだったと思ってみなさい、つるんとした目も鼻も無いとなったら、こんな面白くもない顔無いです。だから、特異点が有る方が良いんです。至る所に有るんです。

僕は非常に恩恵を被ったのは、Zariski 先生のところに行ったことです。Zariski 先生は非常に親切で、道路で会うと「お金のこと何かやっているのか」と言うから、「僕、タイプライター位は買いたいんだけど、それだと論文が書けるから」と言うので、「あっそうか、いくら位だ?」と言うので「40ドル位かかるんですよ」と言ったら、「40ドル」と言って、ポツとお金くれるんです。何時返せとも言わない訳です。僕返しました、何年かして。

3.6 Zariski の 4 人の学生

彼のところに、僕を入れて 4 人が居た訳です。



一番右の背の高いのが、ドイツからお父さんの Emile Artin という数学者に連れられてアメリカにやって来た Michael Artin. 自宅ではお父さんは厳しくて、英語を一寸でもしゃべろうとすると、“Deutsch!” 言ってたそうです。その次に居るのは Kleiman というのだけれど、彼はアメリカで生まれた人で、またアメリカ並みの良いところ持っている。それから三番目に居るのが David Mumford というんだけど、彼はイギリスから若い時にやってきた人です。で、一番左のちっこいのが僕なんですけど、日本からやってきた。一番ちっこいけど、一番背が高いじゃなくて一番年上なんです。他の連中は皆若いです。けどあの連中の才能というのはスゲナー、やっぱり。

神様というのは平均して才能というものを配るものじゃないなと思いました。とにかくメチャクチャに頭が良い連中でした。David Mumford というのは特に凄いです。それから Michael Artin という人は非常に“数覚”のある人でした。のんびりしているようだけど、何が良いかということもさっと気が付く人なんです。要するに小平先生が昔言っておられたけど、“数覚”というものがあると、鼻で数学の問題を嗅ぐというのです。その“数覚”というものを持った人は、遅くても良い仕事をするよ、とそんなこと言っておられたことあるんです。Michael Artin という人は非常な“数覚”のある人でした。それから Kleiman というのも元気な人で一番若かった。

David Mumford というのは、頭が良くて、勘が良くて、そして非常に優しい。この三つ揃いというのは中々ないですよ。横綱でもないですよ、三つ揃っているのは（笑い）。とにかく大鵬みたいな人です。こういう人がいたということです。僕より 5 歳か、7 歳か、6 歳年下なんですけど。とにかく色んな事を教えられました。

こういう幸運に恵まれることがあるんですよ。この四人はいつも一緒に勉強してました。

3.7 Grothendieck との出会い

“環境子”というか、環境に恵まれたら、それが非常にプラスになるということが有る訳です。僕は非常に恵まれました。僕の良い点というのは、横着なところで、それから見せかけなんて屁とも思わない人ですから、おもしろい話があるとすぐ飛んでいくのです。

Harvard に居た時、Grothendieck という数学者が来て話をしました。その時、僕は大学院の学生だったんですけど、小平邦彦さんが隣に座っていて、左側には Raoul Bott。その時 Harvard の教授をしていた人です。まあ僕はまだ学生だった。僕はまだ博士号も取ってない時だけど、3人が一緒に座っていて、小平さんが Bott の方に向かって、「お前分かるか、Grothendieck が言っていること」、「分からない」。スキームの理論とって、非常に抽象的な話をしていたんです。「何のことか分からないよ」、僕の方に向って「広中、お前は分かるだろう」なんて言って、「いや、分からないよ」って言ってたんです。

でもまあ、非常に考え方がユニークな人ですね。非常に僕面白いと思って、彼が泊まっていたアパートに行って良く一緒に話しました。話をしたといっても、数学を教えてもらったと言うんじゃない。「こんな葡萄が美味しいよ」とか何とか言って、一番恰好の悪い葡萄を買ってきて、「恰好の良い葡萄はあんまり美味しくないよ、高くても美味しくない。こっちの方が安くて美味しい」とかいう話を聞いていました。

ある時、もうパリに帰るときに「パリに来ないか」という訳です。「ああ、行きましょう。もうお金は無いけど」と言うと、「その位は何とかなるだろう」。彼は教授になっていたから「それ位は出してやるから」、「それじゃ行きます」。僕は贅沢というものを知らない人間だから、何処へ行っても平気で暮らせる自信がありましたから、行ったんです。

3.8 Paris で

行ってみるとビックリしたのですが、その時 Rond-Point Bijoux N° 5 というアドレスだった。Étoile 近くの廃墟となったミュージアムの一階の半分を借りてそれを研究所と呼んでいるんです。それで所長が一人、モチャン (Motchane) という人で、ルノーからやってきたビジネスマンです。それでも数学科を卒業した人です。それが所長。それから、教授が二人いた。Grothendieck、まだ若かったけど、それと Dieudonné という人。Dieudonné は、Grothendieck に、こいつは凄い才能を持っていると惚れ込んで、Grothendieck のために研究所を作ろう、そしてモチャンというルノーの重役さんをやってたような人を説き伏せて、とにかく研究所を作った訳です。二人教授が居て、所長が一人いて、研究員が一人いたんです。それは僕なんです (笑い)。だけど、贅沢言わなければいくらでも生活出来るんです。この時代の普通の国に生まれた以上、贅沢言わなければ生きていけるんです。暫くすると Deligne という若い坊やがやってきて、Grothendieck は「こいつは Hilbert 以来の天才だ」と、こう言うのです。「あつ、そうか」と言って

見てたんだけど、Deligne というのは凄いなと思ったのは、Grothendieck が何か説明すると、「ハッー、ハッー、ハッアー」という感じで感心して居るんです、何を言っても「ハッー、ハッー」。僕の家内が、家内といっても家内になろうとしていた人がですね、「Deligne というのはお坊さんみたいな人ね」とか言ってました。

そして、僕、後に Harvard の教授になって、かつて住んでいた Harvard のすぐ近くの、向いが Harvard というくらい近くに一軒家を買って住むことが出来るようになったんです。その時、Deligne なんかも、その時はもう偉い人だったけど、もう立派な教授になって僕の家に住んでたことあるんです。

4 研究者として

4.1 Brandeis 大学に就職

少し序に、数学の人だったら知ってると思うけど、この右に立っている人は小平さんです、小平邦彦さん。Harvard にきていて、よく一緒に机を並べました。あつ、真ん中にあるのは僕です。それから左側にいるのが松阪といって Brandeis 大学の教授をしていたんです。これは京都大学を卒業して、京都大学では助教授の席を井草に譲ってアメリカへ来てた訳です。それで Brandeis 大学の教授をしてたんです。僕は博士号を取った途端に、Brandeis 大学から話がかかって、「Brandeis 大学の研究助手にならないか」、「やー、いいですよ」と言いました。僕はね、今まで自分の給料とか何かいうことを気にしたことないんです。向こうから言うてくるから、就職願とか何とか書いたことは一度も無いんです。僕の何が好きなのか分かんないけどね、まー、世の中には Trump さんを



好きな人が居るんだから。とにかく、松阪さんのお陰だと思っただけど、「Brandeis に就職しないか」、「結構です」と言っただけで就職しました。もう給料も入りだしたから、チャント結婚して、それで子供もできた訳です。4年間過ごしました。

4.2 Columbia を経て Harvard の教授に

それからですね、何もしないのに Columbia 大学からやって来て「Columbia 大学に移らないか」、「僕はまだ助教授ですよ」、「じゃ、一年待って呼びましょう」という訳です。一年半すると、Columbia 大学でも教授で雇うという訳だ。

僕は博士号をとって、最初の一年は助手みたいのやって、二年目に chairman から電話が掛かかってきて「お前の給料」、年俸なんですけど、「年俸で 500 ドル増やしてやる」とか言って一生懸命自分を説得した。「何いってやんでー」と思ったん

です。その時に僕の年齢の人で、MIT で助教授やっていた連中は、もう2万ドル位貰っていたんです。Columbia 大学からやって来て、2万ドル給料を出すというのですよ。「そりゃ行きますよ」といったんだけど、「先ず、準教授位になれ」というから、僕も Brandeis の先生に言ったら、「来年は準教授にする、最後の年は準教授にする」ということです。助手、助教授、準教授で4年間が終わって、Columbia 大学へ行ったら教授です。運が良いというのはこんなもんですよ。

そして、Columbia 大学で4年間教えた訳ですけど、そしたら Oscar Zariski、僕の指導教官だった人がニューヨークへやって来て、「広中、Harvard に教授になって来ないか」、「はあ、そうですか、行きましょう」、頼まれたら行くんですよ、頼まれなかったら行かないんですよ。

4.3 子供をキチンと育てなければ貧乏になれ

山口大学の学長になったのも頼まれたから行ったんです。それからやっぱり郷里ですからね、他の所なら行ってないです、頼みにこないからね。陰では、あそこの学長、あるいは県立大学の学長やらないかとか、そんなこと言ってる訳です。それならチャント申し込めば良いのに、向こうが申し込まないからこちらは行かない。

今の子供達は可愛そうです。考えてもみなさい、子供というのは、非常に親孝行な子供というのがいます。しかも、物凄く貧乏な家庭に生まれて、親孝行する人が居るんです。ところが、物凄くお金持ちの所に生まれて、親殺しだって居るんです。人間というのはそういうものなんです。そのことを知るべきです。だから、「家の子供、どこの大学受けさせましょうか」と訊くから、僕は「そんなこと考えるより、とにかく貧乏になれ。そうすると子供は一生懸命に勉強します、勉強しないと将来が萎んでしょうがないから。それから美味しいもの食べないから、肥ったりしない、何時まで経っても痩せていて良い形である」。

4.4 小沢征爾との出会い



2人が初めて会ったころ

それから不思議に、Paris に行って Grothendieck から色んなことを勉強したけど、それと同時に、その内に小沢征爾という人に会ったんです。フランス語をもう一寸勉強しなければならぬと思って Alliance Française というところに行ったら、彼も居て、「俺達フランス語下手だなー」、「そうだよ、俺もそうなんだよ」、「日本語で話そうよ」、「日本語っていいなー」なんて言いながら。そして時々僕を呼んでは一緒に遊んだというか、そういう時もあったんです。小沢征爾ともずっと長い関係を持っています。これも不思議な縁です。

僕が Harvard の教授になった頃は、これは Boston Symphony の主任指揮者になっていて、僕が Columbia 大学の教授

やってた頃は、彼は Bernstein の Assistant Conductor かなんかになってました。だからいつも Paris で会って、New York で会って、また Boston で会って。そしてもう彼の事完全に忘れていたんですけど、ある時電話がかかってきて、「サイトー記念という音楽行事をやってんだけど、そのための財団の理事長やってくれないか」という訳です。「何やってんだ?」、「音楽やってんだよ。松本で音楽やってんだ」という訳です。「僕は音楽やるのは無理だよ」と言ったら、「いやー、音楽のこと知らないから良いんだよ」。「それなら僕は親友だから理事長やってやろう」と言って9年間理事長やりました。

4.5 Zariski を名誉教授に

Mumford と僕が Harvard の教授になっていたの、二人とも Fields 賞を受賞して、そして生徒が二人 Fields 賞を受賞するのは珍しいというので、僕達は、僕達の定年退職していた教授に名誉教授を推薦しようとした訳です。僕丁度学科長をやっていたので、その時にエスコートして行った訳です。そういう写真です。こんな詰まらない話で良く聞きに来ますね。



本当はですね、Oscar が AMS American Mathematical Society かな、そのの会長になって色々挨拶しろと言われた。挨拶しろと言うときに、注文が来てたと言うのです。それは、彼はロシアから逃れて来て、イタリアでムッソリーニに苛められて、またアメリカに逃げてとそういう経験を持った人だから、特にイタリアの代数幾何の、特に華やかな時期が有った訳だし、そのことも知っているから、その頃の話をしてくれないか、と言って頼まれたんですって。だけど、彼は「自分は現在研究している数学の話しかしない」と言って、会長の癖に数学の話始めたという学者です。

5 妻に捧げる一番素晴らしい論文

5.1 僕の不思議な才能

あんなに偉い Zariski 先生の真似をするのは恥ずかしいのだけど、僕数学の話をします。

僕位の才能、勘の鈍い男は、不思議な別の才能を作るんですよ。それは、どういうことかという、僕は講義を聞いていてもその時は感心するが、すぐ忘れる。

学生運動で、僕達学生は皆出て行く訳です。それで「広中、お前だけ残って講義聞いていてくれ」、「結構」と言っ、それでノート書いて置く訳です。そして「どんな話だった?」、「忘れたよ」、「まあ、お前ノート見せろ」と言うから、ノート見せると「まあ、お前こんなに良く聞いていたんだ、すごいねー」と言うんだけど、全部忘れてるんです。それは子供のときからの癖なんで、僕は聞いてすぐ忘れるんです。今、この歳になってもあんまり変わらないんです。だから僕みたいな記憶力の悪い人間は、80歳になっても悲しまないんです。昔と同じなんです(笑い)。ただ昔は記憶が蘇ってくるんです。だから、何か聞いたなと思っても、どうしても思い出せないんだけど、何か他の遊びをしていて一週間か三週間か、一ヶ月位すると、ああ、あの人はこういうこと言っていたんだ、と言うことを思い出すのです。そういうのを昼行灯って言うのだけどその癖がズート残ってんです。

5.2 齢をとっても変わらない

こういう種類の鈍くさい所は、85歳位になっても変わらないんです。それは、僕は若い人に良く言うんだけど、85歳になってみなさい、そしたらね、三つの問題が出てきます。

5.2.1 記憶力

一つは、記憶力、特に短期間の記憶力は全部無くなります。僕はもう例えばメガネを何処に置いたか忘れて、階段を上がった、降ったりする訳です。そのお陰で足が丈夫なんです(笑い)。そしたら僕の知ってるのが、「私もそうやりましょう」と、そう言っているんだ。

それからそのことが少しも気にならないんです。平気なんです。「お前だけだったかなー」って平気で訊くんです。で、聞いてもすぐ忘れるんです。

5.2.2 瞬発力

そしてもう一つは瞬発力というのが無くなるんです。僕は若い時に、最初に特異点解消の論文書いた時には、3週間ぶっ続けで書きました。最初に書いたものをMITの連中に、またHarvardの連中に見せると、「よく分からない」、「おかしい」と言い出したんです。それで「もう止めた、一人だけでやる」と言って三ヶ月徹底してやりました。僕の家内が「今日何枚書いたの」と聞く訳です。「これだけ書いた。誰かにタイプしてもらってくれ」。それでまた翌朝になると「今日は何枚?」とか聞いてたんです。中々良い女房ですよ。僕はそのときタイプ出来なかったし、タイプライターも無かったので、それで長い論文になってしまった。長くなった

のは、下手に書いてるからです。小平さんの友達で Spencer という人が居ただけで、「広中の論文長いなー、凄いなー」、「電話帳みたいだ」って言うんだけど、あんな今は今だったらもう3ページ位で書けます。下手だから長かったんです。それが出来たのは、それだけ辛抱強いからなんです。

それで今書いているのもそうなんです。瞬発力というのが無くなった。だから、瞬発力は無いから、途中で一行か二行書いたら、今ワープロで書くんですけど、ワープロじゃあない TeX で書くんだけど、どんなメガネ掛けても、6と8というのは間違えるんです。また9と8というのが一番良く間違えるんです。ボンボコ打って行くと何のことか分からないんです、チャント間違えているんです、見事に。それで元に戻って書き換える訳です。書き換えると、今度またちがった所間違えているんです、隣になっているキーボードがあるからね。ウンと離してくれば良いのに（笑い）。しょうがないですよ、本当に凄く時間が掛かるんですけど、だけど時間が掛かるというのは楽しいんです。サササーと論文書いて良い気持ちになる、それだけのことですよ。一個書いたところで褒められて、立派な良い論文だと言われて、まあ、3年か4年経ってみなさい、そんなに立派だとは思ってないですよ、自分で自分自身はね。人がそれに影響されて色々やっていくから、それはそれで良いことなんですけど。

5.3 持久力のないことの楽しみ方

だけど自分が一番喜ぶのは書き終わった時なんです。ところが僕は書き終わるのが遅いから、楽しみが長いんです。こんな良い事無いです。瞬発力が無いということは立派なことなんですよ。

それからもう一つは、持久力ということなんですけど、持久力も落ちます。5時間もやると、僕のように下手なタイプの人間が5時間もずうっとやっていると、僕は睨みつけないと見えないので、乱視っていうのかな、それで動いちゃうから。まあ、書き直して見れば分かるから、それを書き直せば良い訳だし、そのように物凄い時間掛かるんです。それも5時間もやるともう頭がおかしくなるんです。そうしたら僕は幸い音楽が好きだから、音楽を聴くことにしてるんです。そして音楽を一時間位聴いたら、もう良い気持ちになってきて、また書き始めることが出来るんです。

5.4 金婚式での宣言

僕は結婚して50年経ったときに、金婚式というのをやったんです。そしたら親戚だけ集めて200人近く集まったんです。だってね、僕の姉、一番上の姉は今ももう100歳に近いんだけど、16歳の時に結婚したんです。親父が結婚しろと言って、それで結婚させられた訳です。子供が出来て、その子供の子供がいて、またその子供までいるんです。僕の父と母の兄弟でも結婚して相手もいるし子供もいるし、子供が二人も三人もいるし、中には孫もってるわけです。

僕も孫持ってますけど、曾孫を持っている奴もいるんです。それで全部集まったんです。200人位集まったんだ。僕はようけ居るなと思って、これで昔戦国時代だったら、軍隊作れると思う位。Baby でしょうがない奴もいるんだけど。

その時にね、金婚式の時に何かしゃべれと言われたので、何か言わなくっちゃと思って、これは丁度西暦 2010 年で、だから 7 年前です。僕は「一つ、今まで自分が発表したどの論文より凄い論文を書いて、家内に献げる」と言ってしまったんです。

一寸年取って無理なんだけど、言った以上やらなければならない。4 年前に韓国で出た論文を出発点として研究を始めました。

5.5 抽象代数の有り難さ

それはどんなんかという、特異点というのは、何ていうのかな、絵を見せると良いんだけど、色々尖がった所とか、何とか有る訳です。これを見ても分かりませんが、尖がった所とか、交わった所とかです。それをどうして特異点の無いもののイメージにするか、ということなんです。こういう絵ばかり見ているともう嫌になって来ます、遣りたくなくなります。昔の人、僕の先輩達もその性だと思っうんです。

ところがですね、僕は永田先生に抽象代数というのを教えて貰ったんです。そして又、Grothendieck のところへ行った時にもっと近代的な代数、何て言うんだらうな、algebraic、まあ要するに functor とか何とか言って、そういうものを Grothendieck のところで一生懸命学んだ訳です。だからその、抽象代数という言葉はチットモ怖くないんです。抽象的な代数の面白さは、要するに目に見えるものというのは実際には複雑すぎて手に負えないんです。ところがそれを代数にしちゃえば、色々いじくることが出来るんです、多項式ですから。多項式の係数を色々変えてみたりして、あるいは微分したりなんだしていろんな他の多項式作って、多項式を合わせてみると、面白いものが出来たちゅうもんです。途中の幾何的なプロセスなんては全く分かりません。だけど、最後には結果が出るんです。だから、代数というのは何が良いかと言うと、自分が何やってるのか分からなくって、良い結果が出せるということなんです。最後に出せなければお仕舞いですけど (笑い)。

5.5.1 There are always two possibilities

まあ、どっちかですよ。僕が大好きな喜劇俳優で Danny Kaye というのが居たけど、彼は映画の中で必ず “There are always two possibilities.” “成功するか、失敗するか”、

“良いか、悪いか、必ずどっちかだ”、 “There are always two possibilities, everything has two possibilities.” そういうのを言って皆を笑わせていたんですけど、考えてみると、中々良い事言ってるなー、と僕感心してたんです。

とにかく代数か、幾何か。幾何というのはこういう絵を見せてくれる、可視化してくれてるので、非常に良いヒントが出ることもあるんです。

5.5.2 Thurston の視覚的才能

Thurston という Princeton の教授になってる人が居るんだけど、彼について Raoul Bott が Michigan 大学に居た頃、彼の入学のテストに関して、Thurston を合格さ

せるか、させないか、色々と議論になったらしい。それは、問題を出しても、彼は絵ばかり描いているって言うんだ。式を全然書かないから本当に分かっているのか、分かっていないのか、分からないって。

彼は視覚的な独特の才能を持ってるんですね。だから、それはそれで良いんです。それで Princeton 大学の教授にもなった。そういう人も居る訳です。

見てどうしたら良いか分かる人というのは、中々そういう人でないと出来ません。もっともっと複雑な物は幾らでも有るんです。この絵は、人の絵を借りてるんで、後で怒られるかも知れない。僕にはこんな絵描けない。だけど、幾何は可視的な要素があってヒントを得るにはいいんです。図形とか何かです。

5.5.3 代数の素晴らしい性質

ところが代数ってのは何やってるか、自分でも分からないことが勝手に出来て、何かの間違いで良い結果が出るのが有るんです。こんな素晴らしい性質持ってるんです。だから代数幾何が面白いのはそこなんです。見て楽しめるし、全く見えないでも楽しめる、そういうところが有るんです。

特に特異点解消の問題が、僕は非常に気に入ったのは、見る事が出来ない。それで何か分からないけど勝手に書いてやって、途中で何か分からない、自分でも。だから良く間違ったこと言うんですけど、だけど最後には何か漕ぎ着けて、というところが有るんです。

5.6 女房に捧げる論文

そのことを2004年に一つの形にしようと思って、一つ、女房に約束した以上何かやらなければならないと思って論文書きました。それは、それまでにこういう発想が有ったんです、これは1964年位から持ってたんです。それは、ある意味では少しは成功した。

5.6.1 Maximal Contact

どういうことかと言うと、特異点を持ったものに対して、特異点を持たないもので上手に斬り付けると、contact exponent というものが出来るんです。要するにどれだけくっついてるか。一緒になること出来ないんです、こっちは特異点があるし、こっちは特異点の無いものです。だけど曲げることは出来る訳で、そこで maximal contact という考え方がハッキリしたんです。ところが、そのためにはあらゆる斬り方を考えなければいかんし、もう山ほどある訳です。それで山ほどあるものを扱いなさい、見なさいと言っても、見えないです。元々のものも見えないものを斬ってる訳だから、益々見えないです。

5.6.2 有限生成代数と同値

ところが、これ代数化すれば、実は有限生成の代数で同値になるということを発見したんです。そうすると有限生成の代数、有限生成の graded algebra というんですけど、それは有限生成ですから、その生成元だけ見れば良い訳です。しかも、その生成元というのは非常に特殊な恰好をしているということも分かった訳です。

それは何故かと言うと、微分という operation, 微分・積分, いうのは無いんだけど、微分という operation が有る訳です。微分したら一般的に、方程式で何かで定義されているけど、微分したのを見ると、もと以上に特異点が拡がるということが分かっていた訳です。だからドンドン微分して、最後に特異点が拡がり過ぎれば、平面になっちゃう訳だから、これで助かるという感じになるんです。それは標数 0 の時には非常に旨くいった訳だ。標数 p の時には旨く行かない。 p 乗という奴が、多項式で書くときに変数の p 乗という奴がショツチュウ出て来て、これ以上微分しても何も出てこないんです。だけど有限生成であるということが有れば、有限個の特殊な関数だけを扱えば良い。これは助かります。これはもとの図形とどんな関係にあるかということなど知ったことじゃあねえ、というものです。有限というのは有り難いものです。それでその論文書いた訳です。それは川ノ上君という若い人がここに居て、非常に綺麗に書き直してくれたから、非常に助かったんです。それが最初の切っ掛けです。

5.6.3 Differential Product

それから、もう一つは differentiation product といって、方程式を微分して、何でも良いから微分を掛けて、また同じ方程式を違った微分をやってみて、そして掛け算するんです。differentiation product といってるんです。

そうすると、微分するだけだったら取り出せないのが取り出せるんです。それはどういうことかと言うと、さっき言った生成元というのは、大体あるパラメータ y^p とか足す高い次数のものがあると、そういう形になる訳です。だけど、全体が p 乗だったら、どこもかも p 乗だったら、 p 乗根を取れば良い訳です。こんな楽なことはない。

ところがそれから 10 年位頑張っってやっと見つけたんだけど、こっちの p 乗でない部分は大人しくしよう、というか、multiplicity と言うんだけど、それを下げようと一生懸命頑張っている人いるんです、何人も居るんです。それは難しいんです。一寸下げたと思ったら、また上がっちゃた、下げたと思うと上がっちゃた。これ以上、上がらないというものを作っても、そんなんじゃ役に立たないんです。ところがですね、その differentiation product というのは、differentiation だけじゃなくって、旨いこと二つ differentiation して product を作ると、丁度 p 乗でない項を捕まえることができるんです。

5.6.4 Leverage Up と Exponent Down

しかも differentiation product というのをやると素晴らしいのは、 p 乗が入っているところでは標数 p の時はですね、homogeneity degree って、その方程式がその degree のところですが、そして微分なんかして出て来る degree と二つあるんですね。だから僕が考えたのは“leverage up”, “exponent down” というテクニックなんです。下げようと思わないで、ドンドン上げちゃいなさい、上がってくれば、こんな良いこと無い。 p 乗の部分 y^p を心配する必要ないわけです。だから、ドンドン上げることを考えればいい。こっちの p 乗の所は残せば良いと。こっちのほうをドンドンと微分と product をつくれば、ドンドンと上がってくれる訳です。何故かと言うと、少し計算してみれば分かるんですけど、微分したのと、二

つの微分をして、微分と言うか differentiation をしてですね、それを product すると homogeneity degree というのは下がるんです。homogeneity degree というのは、さっき言った graded algebra の中のどこに居るかということなんです。ドンドン下がってマイナスになるんです。この degree というのは何を意味するかというと、transformation したときにですね、その方の何分を取り除くかが課題です。exceptional divisor が出てくるかということなんです。何倍の新しい exceptional divisor が生まれるか、新しい exceptional divisor が出て来る訳だけど、何倍出てくるか、それを消せばよい。そして新しい transformation して、それを取ればよい、重複度を下げれば良いという考えの人達はほとんど失敗してるんです。僕は逆に上げようというのを考えた訳です。上がるっていう形にしておけば、その有限個の summation で書いとけばですね、ドンドン上がってくれる訳ですから p 乗項の邪魔になる心配ないですよ。 p 乗のところだけを見ればよい、だから、忘れて良いんですよ、ここは。だから p 乗でないところを忘れられる訳です。そして残ったものは p 乗なんです。だから、leverage という方法で逆に重複度を上げてやれば、そしてそこを無視すれば、 p 乗根ができるよいうので、最後には一次式の項から始まる式が出てくる訳です。それは特異点を持たないものが出て来るわけです。これを見つけたら、今度はこれを使って ambient reduction と言ってですね、要するに低次元の問題に翻訳できる訳です。これで、induction が出来るということが分かったんです。

それから面白いのは、標数 0 と標数 p の結果を合わせると、arithmetic な singularity も解消できるんです。これは又面白いんだけど、これはそんなに難しくはないのです。

難しいのは、leverage up, exponent down, これをきちっと global にすることなんです。local には出来るんだけど、簡単に出来るんですけど、これを global にやらなきゃあならぬので、それは相当苦労して、約束してから7年が過ぎてしまいました。

5.7 何時できるの？

その間、家内に献げると言ったから、

家内が、「何時できるの？」。あるとき「もう一年位掛かるだろう」って。また一年すると「何時できるの？」って言うから、「もう一年かなー」って。そう言っているうちに7年も経ってくる。最後には「後一ヶ月でできるよ」って。いろんなところで辻褄が合うようになってきて「後一ヶ月」と言うわけです。そのうちに、もう出来たなと思って「後1週間」と言う訳です。また1週間経つとまた、「何時できるの？」、「俺、 \TeX で書くの、こんなに大変なんだよ」と言って見せるんですけど、「何のことか分かんない」。まあそれで、「あと1週間」。「あと1週間」を繰り返しているうちに、訊かなくなるんです。「何で訊かないんだ？」と言うと、「もう何遍訊いても、いつも同じことを言ってるから」。そいで、そのころやっと完成したのです。約束を果たした訳です。未だ \TeX のミスプリントを無くするのに何ヶ月もかかるかも知れないけど。

6 数学は抽象的学問

6.1 役に立つとは？

だけどその結果が使われようがどうなろうと関係ないんです。数学というのは明らかに抽象的な学問です。だから役に立たないと言う人も居るでしょう。だけど、役に立たないと言う人は、“役に立つとは何か”ということを考えてみたら良いんです。役に立つか、立たないかというのは非常に難しい問題なんです。今役に立たなくても100年後に役に立つかも知れない。

Einstein が Nobel 賞を貰ったのは相対性理論ではないんです。だけど、今頃になって天文学でも物凄く Einstein の理論無しにはもう議論もできない様になっています。一方、何時までたっても役立たずも多々あります。だけど全てはそうなると思って研究しているというわけではないんです。“役に立つ”とか“役に立たない”とか言う時はですね、気を付けて下さい。「何時の事ですか、一年先の話ですか、一ヶ月先の話ですか、100年先のこと見えますか？」と訊いた方が良いでしょう。

6.2 数学は楽しい、何時になってもできる

それから、もう一つは、やってると楽しいです。こんな楽しい学問は無い、と思います。そして何才になってもできるんです。ただし、やり方、態度を変えなきゃあならないです。まず、最先端、最先端と考える人は、まあ若い時に良いです。それで、80才になっても論文を書き続けようと思ったら、そんなに速く沢山書けない。書いた時の喜びというのを実感したいと思った人なら、最先端、最先端、直ぐに役に立つとか言ってあせって苦勞するより別の道もあると考えれば良いと思います。

7 終活

チャイコフスキーは最後に第5番シンフォニー書いた時、あんまりあれやこれや入っていて、技術的にも非常に複雑なところもあるんだけど、物凄く美しいところも、そうでもないところもあるんだけど、当初はあんまり人気がよくなかったという小文を読んだことがあります。だけどチャイコフスキーはその作曲を終わった時に、嬉しくて涙を流したというんです。

こんなこと経験したくないですか、死ぬ前に。これは誰にということではなくて、自分が自分の仕事で嬉しくて涙を出すという経験をしたいと思わないですか。そんなことは詰まらないというんだったらそれもその生き方で結構ですけど、その人の好みですから。僕にどうのこうのは言う資格はないので言いませんけど、僕はその方が良く思うんです。僕はそうします。棺桶にはいるときに、涙出してほほえむかも知れないです。

それから、数学は抽象的だから何処でも出来るんです。

まあ、本当は細かいことを言おうかと思ったけど、もう時間が来たので止めます。今僕が書いている論文のコピーを見たいという人が居たら、僕の所に手紙を

送ってください。85歳でもこれ位のことは出来ると言うことを知っておいた方が
良いと思います。ただし、余り早く女房に約束しない方が良いですよ、それは若
いときはそれで良いけど。

ま、それで話は終わります。

思いもしなかった市会議長に

能見 勇八郎

1965年3月学部卒業

井川君の方から1月末に11月19日の数学教室同窓会の懇親会でのスピーチの内容を原稿に、という依頼を受けました。そのうち書こうという思いはあったものの、ついに6月末までにとという督促も受け、いよいよ筆をとると非常に申し訳ない仕儀になりました。お許し願いたいと思います。

こう申し上げるのは1月末の時点ですすでにスピーチの内容の記憶が不鮮明であり、それがさらに進んでいるという前提でのレジュメであるというご理解のうえでお読みいただきたいと思うからです。

私は昭和40年に卒業し、文学部哲学科に学士入学し、主としてベルクソンを中心に哲学を学びました。この間、夜間定時制高校の教諭、私大の非常勤講師などを勤め、その後、駿台予備学校で数学の専任講師として勤務しました。

私は高校時代から文学部か理学部かと迷っていました。溝畑先生の所で学び、大学院進学に向け勉強していましたが、試験前日に文学部への転部を決意し、試験を受けませんでした。翌日「君は何を考えているんだ」と先生に叱責されましたが、そのまま数学科を去りました。そして、二十数年の歳月が流れ、一年後に溝畑先生が定年を迎えられるという時点で、同窓生による送別もかねた懇親会があり、私もさそわれ、参加しました。卒業以来一度もお目に掛かっていない先生にお会いすると「君のことは良く覚えている。もう哲学いいでしょう。数学に帰ってはどうか?」と言われたのは大きな驚きでした。予備校で受験数学に深くかかわるのは、その数年後からです。



卒業研究 数学解析

後列右から2人目 溝畑先生 前列右から2人目 筆者, 1965年

しかし、市町村の所謂「平成の大合併」に際し、危機を感じ故郷、兵庫県の生野町の議員に立候補し、この道に入ることになりました。現在はこの合併で誕生した朝来市の議員であり、議長も務めさせていただきました。

そのような経過で、今日は市町村という基礎自治体の議会の現状を少し話させていただきたいと思えます。ご存じのように、平成7年に「地方分権一括法」が制定され、平成12年より施行されました。これによって、それまで基礎自治体の業務の多数を占めていました国の機関委任事務が廃止され、国と地方の役割分担が制度上、明確になり、地方自治体の権限が飛躍的に拡大し、特に平成15年以来の「平成の大合併」により自治体の首長の権限が飛躍的に拡大します。ここで議会も独自の改革の必要にせまられます。これに先鞭をつけたのが平成18年5月の北海道栗山町の「議会基本条例」の制定です。このような動きを受け、我が朝来市でも兵庫県で最初に「朝来市議会基本条例」を平成20年に制定し、平成21年4月より施行します。これは議会運営の最高規範であり、市民参加のもと、議会と議員の責務と活動原則の明文化し、議会の活性化を目的としたものです。

主なものとしては、まず議会、特に委員会における討議の重視、つまり議員間の意見交換を行う場をもうけ、議会としての意思の決定に努めます。旧来の議会では、当局による条例等議案の上提と主旨説明、本会議、委員会での議員による質疑があり、その後、直ちに賛成、反対の討論、そして採択が行われていました。つまり、行政に対する議会のチェック機能が議員個々人の意思でバラバラに行われ十分機能しているとは言えませんでした。これに対して、基本条例制定により、議員は質疑の後、当局抜きで、議員だけでその議案について、意見を出しあい、その評価すべき点、問題点等を洗い出すという討議を行い、議会としての意思を決定し、賛否を問うという方法をとります。これにはかなりのエネルギーと時間を要しますが、議会が真の意味で市の意思決定機関として機能することに成ると考えています。

2つ目に市民の参加という観点から「一般議会」の創設があります。議会の本会議、委員会には市民は参加できません。傍聴のみが許されます。参考人招致と言っても、市民は自由な意見陳述はできず、議会からの質疑に答弁するだけです。これに対して「一般会議」は、少し耳なれない言葉ですが、商工会、森林組合、介護保険事業者など、対象となる団体や事業者を絞り、その団体等の代表者数名と議会の委員会の議員、当局の職員も入り、あるテーマを決めて、意見交換を行う会議です。一般市民が議員と同等資格で討議に参加し、自由に意見を述べる場を持つものです。このことにより議会は市民の意見を汲み取り、政策、提言にいかそうとする制度をもうけています。

このほか、議会の調査、審査に必要な様々の資料の要求権の明確化、議会報告会など朝来市議会では多様な取り組みを行っていますが、本日はその一端を述べさせていただき、皆様に地方の議会がどのような活動を行っているか、ご理解いただく一助となれば幸いです、スピーチとさせていただきます。

どうもありがとうございました。

京大数学教室近況報告(11/19/2016現在)

平成28年度 数学専攻長 山口孝男

数学教室の近況についてご報告します。

1. 構成員

数学教室の現在の構成員は、教員数52名で、その内訳は、教授18名、准教授22名、講師2名、助教5名、特定助教5名、客員教員が7名です。

現在、准教授2名、助教3名を公募中です。数学教室をサポートする体制として、数学事務室に9名、図書室に4名、用務員室に3名の職員がおられます。

2. 主なプロジェクト活動

数学教室が取り組んでいる主なプロジェクト活動として、KTGU 数学系ユニットと MACS 教育プログラムがあります。

1). KTGU 数学系ユニット

昨年度から開始されたプロジェクトで、森重文先生が初代ユニット長でしたが、今年度から國府寛司教授に引き継がれています。下記がプロジェクトの内容です。

- 海外の著名な研究者を招聘し、特別講義を開講、
- 海外副指導教員による大学院生に対する共同学位指導の実施、
- 大学院生への海外渡航支援、学部セミナーの開催

これまで17名の世界的な研究者が特別招聘教授や特任招聘教授としてプロジェクトに参加しています。また、海外副指導教員による共同学位指導を受けるなどの定められた基準を満たす学位取得者には、スーパーグローバルのコース修了証が授与されます。昨年度は、3名の学位取得者にコース修了証が授与されました。今年度は、5名もしくはそれ以上の学生がコースを修了する見込みです。

2). MACS 教育プログラム

これは概算要求による研究科内のプロジェクトで、今年度から始まっているプロジェクトです。目的は、数理を基盤とした理学5分野を横断する融合研究を促進し、新たな学問分野の自発的創出を促すことと、それに対応できる優れた若手研究者を育成すること、となっています。そのため、理学研究科の複数の専攻の教員と学生からなるスタディグループが組織され、分野横断型の教育と研究が行われています。スタ

ディグループの例として、データ同化の数理と応用、自然科学のためのカテゴリー理論、神経回路による情報処理と学習の数理、などがあります。

3. 教職員の異動

次に教職員の異動についてお知らせします。今年度は、4月に日野正訓教授と前川泰則准教授が着任され、5月に保険数学の客員准教授として佐内利典さんが着任されています。また8月には、特定助教（MACS教育プログラム）として石塚裕大さんが着任され、10月には特定助教（白眉）として金沢篤さんが着任されました。新任の方々の数学教室におけるご活躍を期待しています。

一方で、9月30日付で、藤井道彦准教授が琉球大学理学部に教授として、そして船野敬助教が東北大学情報学研究科に准教授として転出されました。これまでの数学教室におけるご貢献に感謝すると共に新任地でのご活躍をお祈りいたします。また9月30日付で、長年にわたって大学院教務のお仕事で貢献されてこられた数学教室事務室の木下万恵さんが退職されました。木下さん、長い間有難うございました。

4. 受賞

最後に今年の教員の受賞についてご報告します。

日本学術振興会賞 日野正訓 教授 (平成 28 年 2 月)

日本数学会春季賞 入谷寛 准教授 (平成 28 年 3 月)

文部科学大臣表彰若手科学者賞 塚本真輝 助教 (平成 28 年 4 月)

日本数学会建部賢弘賞奨励賞 阿部健 特定助教 (平成 28 年 9 月)

Senior Berwick Prize 日野正訓 教授 (平成 28 年 11 月)

受賞された方々、誠におめでとうございます。今後のご研究の益々のご発展をお祈りいたします。

2016 年度学位記授与式

一昨年度数学同窓会が発足したのを機に、同窓会が数学教室に呼びかけて、数学教室独自の学位記授与式を行うことになりました。

昨年度（2016 年度）の授与式は、修士課程修了者に対しては 3 月 23 日（木）16 時 30 分より、学部卒業者に対しては 3 月 24 日（金）13 時より挙行されました。

下にあるのは、修士課程修了者への授与式の案内ポスターです。

当会が授与式での懇親会の世話をいたしました。飲み物やおつまみなどを提供して、新しく同窓会会員となった卒業生・修了生を歓迎いたしました。



大学院修士課程修了生の皆様へ

理学研究科数学・数理解析専攻数学系
学位記授与式のご案内

大学院修士課程修了おめでとうございます。
理学研究科数学・数理解析専攻数学系の修了生には、京都大学の
学位授与式終了後、数学教室において学位記を授与いたします。
ご出席くださいますようお願いいたします。

記

日時：平成29年 3月23日（木）16:30～
場所：理学部 3号館 127号室（大会議室）

プログラム：
祝辞 --- 専攻主任
学位記授与
同窓会からの祝辞
記念撮影
懇親会

*筆記用具・学生証・印鑑を持参のこと

数学・数理解析専攻数学系
専攻主任
雪江 明彦



平成28年度 京都大学理学部

数理科学系卒業者一覧

青木 佑丞	小豆澤 永樹	五十里 祐真	池 航平	石井 一輝	石本 宙
井上 大雅	大塚 友紀也	大西 智也	沖崎 浩一郎	越智 諒	甲斐 海人彦
梶原 雅史	加茂 寛也	河合 草一	川島 哲士	河本 直紀	木村 亮太
小林 香菜子	小林 嵩弘	櫻井 涼	佐藤 信太	佐藤 稜弥	白石 和也
杉本 祥馬	千田 一紘	曾我部 太郎	高瀬 裕志	高松 哲平	高良 政晴
武田 雅成	橘 由佑子	辻 直樹	続木 俊哉	徳永 優	富田 真生
中島 飛鷹	那木 聡	西尾 優	沼田 俊太郎	野口 博史	幅 俊介
早川 大	原田 陽之進	平井 覇一郎	廣江 泰英	福井 雅仁	福田 正人
藤井 英聡	船越 健吾	古市 大樹	俣田 直也	南 規楽	宮本 浩市
諸山 将梧	柳濱 万里	山戸 康祐	山根 郁太郎	横幕 春樹	連藤 卓真
和田 昌彦					

以上 61 名

平成28年度 京都大学大学院理学研究科

数学・数理解析専攻数学系 修士課程修了者一覧

上柿 一輝	植田 優基	内田 祥見	江川 貴浩	岡野 圭寛	小田原 芳樹
川口 澄恵	上妻 玲兒	鈴川 晋矢	鈴木 綜馬	鈴木 美裕	高尾 信成
宝城 岳	竹内 和也	寺井 亮太	道法 良太	徳満 凜也	中野 雄貴
野中 翼	疋田 眞子	藤岡 睦司	藤岡 禎司	藤原 克志	堀永 周司
松宮 隆晃	松本 岳大	三関 直人	村上 勇貴	森本 真弘	守屋 匠馬
矢嶋 秀伍	山口 浩平				

以上 32 名

修士課程卒業式祝辞

平成 28 年度数学・数理解析専攻
専攻主任 雪江 明彦

皆さん修士課程修了おめでとうございます。修論審査がおわり1ヵ月、皆さんも落ち着いて新たな生活に向けて準備されていることと思います。

私は日本とアメリカで何回か学位授与式に出席しましたが、とてもよいものですね。アメリカでは大学の学位授与式のことを commencement といいます。commencement というのは「開始」、何かの始まりという意味です。欧米のシステムがなんでもよいというわけではありませんが、私はこの言葉が好きです。それは、卒業するということ、これで終わりということではなくて、これからが人生の本番なんだという考え方だからです。

修士を終えて、博士課程に進む人もいれば、教員になったり役所、企業に就職する人など様々ですが、皆さんにとっては、これからが人生の本番でこれからが始まりなんだと思います。ドクターに進む方はもちろんこれから数学の本格的な研究に入ります。企業に就職される方はこれから必ずしも数学を直接使うわけではないかもしれませんが、数学で常にやってきた、抽象化や論理的な思考というものは、企業でもきっと役に立つのではないかと思います。

これからの世の中、必ずしもバラ色ではないかもしれませんが、今までつちかって来た力で、すごく成功しなくてもよいですから、人生を生き抜いていただきたいと思います。本日は大変おめでとうございます。

大学で数学を学ぶということ

平成 28 年度数学・数理解析専攻 専攻長代理 坂上貴之

平成 29 年度の専攻長を務めています。私が学生であったときには数理科学系というものはなく、「主に数学を学んで」理学部を卒業したのは平成 5 年度のことですが、23 年後の昨年度、今度は専攻長代理として卒業生に式辞を述べることになろうとは当時は思いもよりませんでした。実は当日の式辞については事前に文章にしておいて、それに基づいてお話したことは覚えているのですが、肝心のそのファイルがすでに私のパソコンから消えており、それと同期するように私の記憶からも消えてしまいました。数学というのは暗記するものではないことから、済んだことで忘れて良いことはすぐに忘れるというのは「職業病」と言えなくもありませんが、それは言い訳にしかならないので、恥ずかしながら当日同席した数学事務室の皆さんの記憶力を頼りにして、どんなことを話したかということ思い出しながらこの文章を書いています。もしかしたら、内容が少し違っているかもしれませんが、そのときはどうぞご容赦下さい。(平成 29 年 7 月)

教員として大学に奉職して以来、数学を専門とする大学院にずっと勤めて、そこで数学を学ぶ多くの学生さんにつきあってきました。その中で、必ずしも大学院に進学するわけではない学生さんに大学で数学を学ぶことの意味についてよく尋ねられます。そういうときは、「大学の数学を学ぶことを通じて、論理的にものを考えるスタイルを身につけているのだ」と答えることにしています。事実、大学での数学は高校までの数学とは違い、定義・定理・証明といったスタイルで寸分の隙も無い理論体系を学ぶ（ときに随分とストイックな知的作業を伴いますが）ことになります。一方で、それらの定理を直接使って何か新しいことを証明したり考えたりすることは数学の専門家になるわけでも無い限り少ないのは確かなので、その質問は至極妥当なものに思います。しかし、先人が築きあげてきた数学の体系を学部で学ぶことを通して、完全な論理体系とは何か？（そもそも論理に「穴」があるという状況が理解できるのは数学の学生だけかもしれません）考えている問題の必要条件・十分条件は何か？などを考える癖が身につく、それが自らの思考の「血肉」となっていると言えます。

数学に限らず、おおよそ問題というものは、それが定式化された時点でほぼ半分は解決しているものです。数学を学ぶ課程では、数学の問題に対して定式化を行い、それに対して何が問題かを論理的に整理していき、確実に少しずつ解決に近づいていきます。そういう他の学問では身につけにくい数学特有の「思考と行動の方法論」を身につけることが数学を学ぶということなのだと思います。皆

さんのように若く元気なうちに身につけることになる、こうした「思考の習慣」は、生涯を通じて決して抜けるものではありませんし、また社会に出てから後になってそれを身につけるのも決して容易ではありません。

また、応用数学という私の専門もあり、数学を学んだ学生を採用する企業関係者とのつきあいも多く、その知り合いから数学の学生についてよく言われることは、「数学を学ぶと“考える”という行為そのものを身につけているので、何かのタスクを与えられたときに一から勉強をして必要な資料を集めて、それへの解決の道筋を考えてくれるのでいつも感心しています」というものです。確かに普段の数学のセミナーでは、わからないところがあれば、自ら図書館に向いて様々な本をひもといて理解をしようと準備し、自分で手を動かして理解するまで考え、そしてわからないことがあれば先生や友人と議論するといったことを毎日やってきたのですから、これは数学を学ぶという行為の中で身につけた「自然な所作」であることに気がつくのです。数学を学んで何かの資格が得られるわけではないし、実験器具や計算機の使い方などの研究室の持つ専門的な「ワザ」を教えるだけでありません。しかし、何か問題があったら、それにどう取り組むか、どう解決するか、そもそも問題は定式化されているのか？といった基本的なことを始めから考えること自体が複雑化する問題を多数抱える企業において重要な（確保しておくべき）人材のスキルの一つになっており、数学を学んだ人に対してこういう感想に繋がっているのだと思います。

いま、AIや機械学習があたかもものを考えるような姿をして、人間の経験知に迫り、それを超えようとしているように見えます。大学入試にチャレンジする人工知能が現れ、将来は多くの職業がAIにとって代わられるという話も聞きます。しかし、そのような中でも問題は全て人間のための問題であり、その定式化、論理的思考、そこから生まれる創造的な解決策というものは、やはり人間の領分であると思われまます。逆に機械ができることが増えてきて、何が人間の領分かということが明確になるにつれ、数学を学ぶことの意義や意味、その有用性がこれまで以上にクローズアップされるのではないかと考えています。

理学部の数理科学系を卒業する皆さん、これから大学院に進学して、より専門的な数学を学ぶにせよ、就職して数学とは直接関係のない仕事につくにせよ、数学を学んだ4年間で考え方や問題解決のための「人間の領分」で働く力を気がつかないうちに身につけたことに大きな自信を得て、これからの人生を力強く歩んで欲しいと思います。

私の学生時代 3

大学院生の頃

三木 良一
昭和 25 年 3 月学部卒業

1 当時の大学院制度

前に書きましたように、私は昭和 22 年 4 月（1947 年 4 月）に京都帝国大学に入学し、昭和 25 年 3 月（1950 年 3 月）京都大学を卒業しました。続いて大学院に進みました。

学部の時は、入学許可証や身分証明書がありました。大学院生としては特別の辞令的なものは無かったです。代わりに、学費として大学にお金を納める必要はありませんでした。大学院生としては、私のように特別研究生として給費と結びついた者と、就職は一般にしているけれど、ある先生のところのセミナーに参加している者もいました。就職している者中には、これは教室によるらしいですけど、それは多分子算の関係でしょう、学割まで使えた人が居るんです。学割がどの程度の人に出たかははっきりとは知りませんが、私の知っている例として、化学の人で熊本大学に就職した奴が、夏に実験のために京都に出てくるときに学割を使っておりました。

数学でいえば、柳生君、後に同志社で教授になった守本君、斎ノ内君達は全員大阪府大の助手だったんです、少なくとも一、二年間は。それから大塚香代さんも最初の数年は同志社中学の教員だったんです。大塚香代さんの旦那さんは関西医大の助教授かなんかだった。こういった連中はセミナーに属していて、自分達は大学院生であると認識していたのです。

まあ、そういう状況で、とにかく大学院生の外縁はハッキリしてはいなかったです。

2 大学院生への奨学金

私は特別研究生として奨学金を貰いました。特別研究生の奨学金は、専任の一ヶ月分くらいは有ったように思います。特別研究生を最後に辞める時は 7000 何ぼでした。その時の勤めている方の給料はどの位だったか憶えてはいないんです。後年、私が Boursier¹としてフランスに行っていたとき、丁度藤家君（藤家龍雄氏）が立命の専任であった時期でして、彼は僕の後組合の係りをやってくれていました。彼から Paris へ手紙が来て「今年の冬のボーナスが初めて 1 万円を越しました、羨ましいか」というような手紙が来たのを憶えています。ひっとすると 1 万ではなく 5 万だったかも知れませんが、いずれにしても一桁の万でありましたから、これと比較すると、特別研究生の奨学金は悪くはなかったことが分かります。

ただ前期 2 年と後期 3 年で特別研究生の定員は減りました。また立命館に行くと、文学部や法学部の特研生がゴロゴロしていました。特別研究生になるための競争とって

¹フランス政府給費留学生

も、試験一つ有ったわけではなく、指導教授の腕前でしょうね、これは、後期での特別研究生は、理学部では物理の山崎和夫君と僕だけでした。前期は各教室に少なくとも一人ずつ位はいたと思います。

私の一つ下の大田実君は学術振興会というのかな、その奨学生でした。私達は「学振、学振」といってました。

西田君は、卒業した25年には名古屋大学の伊藤清先生のところへ行っていました。その翌年に伊藤先生が京都大学に来られる予定は決まっていたと思います。京都から名古屋に通ったのか、名古屋に下宿してたのか思い出せませんが、彼はいわゆる給料を貰うような就職はしてないし、学振の奨学金も貰ってなかったです。

特別研究生の制度は、上の方の学年はどうなっていたのかは良く分かりませんが、少なくとも楠先生の学年、私たちより二年上の学年では特研生はいました。私より一年上の学年がなれたかどうかは、はっきりとは思い出せませんが、その次の学年の私がなれたわけだから、特別研究生の制度は有ったんでしょう。数学の大学院生が特別研究生になれたかどうかは分かりませんが、学部全体ではその制度はあったわけです。

楠さんの学年の人はひょっとしたら給費であるかも知れません。溝畑、山口さんの学年の特研生は給費だったのです。すなわち返す必要は無かったんです。しかし、僕等の時は貸費だったんです。返すという条件付の奨学金だったのです。

私より下にどこまで特研生がいたのかが分からないのです。例えば新制一期生の良くできた松村さんとか、藤家さんとかはどうも貰った気配がないのです。旧制の二つ下、23年、24年、25年までは、同志社に就職した松井さんの学年までは、数学で居たかどうかは知りませんが、特研の制度はあったと思います。いわゆる旧制大学の時代ですから。ただ、その方達が僕等と同じように後期を終えるまで、即ち28年まで特研生であったかどうかは分かりません。下手すると前期だけで奨学金が終わり、その後は切られたかも知れません。新制用の奨学金に変わったかも知れません。

3 大臣交渉に行く

先にも言いましたように、溝畑、山口さんの学年は特研生の奨学金は給費だったのです。しかし、僕等の時は貸費だった、即ち後で返還するという条件付だったのです。

それで、奨学金を元のように給費に戻させるために、文部省に大臣交渉をしに東京へ行った覚えがあります。法学部に三高の時の友達で乾昭三という男がいました。彼は末川先生の愛弟子で、後に立命館の教授になり、また所謂「末川六法」の編纂に協力しました。立命館を退いた後に京都府の教育委員長もやった男です。その乾と私の二人で夜汽車で文部省交渉をやりに行きました。当時の文部大臣が天野貞祐とかとてつもない偉い人でした。しかし、行ってみると局長位にあしらわれて、我々二人は尻尾を巻いて帰ってきた記憶があります。

京都大学からの代表の二人の内の一として、私が大臣交渉に行ったというと、私が京都大学の大学院生の組織を牛耳ったように思われるかも知れませんが、そうではありません。当時は、各大学に特研会という制度が有りまして、その会の主力は法学部や経済学部の連中だったのです。会を牛耳っている彼らが私達に「東京へ行ってこい」と言うので、行ったわけです。

4 奨学金の返済免除

奨学金の返済に関して、いくつかの決められた職業に就けば返済は免除される、という制度がありました。しかしこの制度が複雑でした。

学部の奨学金に関しては、返還を免除される職業として義務教育、および高校教育までに限られていました。また免除されるためにそこで働かねばならない期間は、およそは借りた年限の3倍でした。毎年だったか、あるいは2年か3年に一度か勤め先から就職証明とか、在職証明を書いてもらい提出しなければなりませんでした。

逆に特別研究生の奨学金返還免除の為には、大学などに勤めなければならない、高等学校に勤めていたのでは駄目なんです。学部と特別研究生の奨学金の免除条件は違うのです。私の場合は、学部では三回生の後半しかもらえませんでした。私は義務教育のレベルの職場には就職してませんから、三回生の後半の部分は返しました。大学院の特別研究生でありながら返済しましたが、半年分の奨学金ですから知れています。

大学院での奨学金の返済免除に関しては、対象となる職業が一々列挙されていて、大学の固定的な研究職、それから統計数理研とか物理の人には理研とか、そういったものが細かく指定されていました。そういうところに就職し、かつ2年か3年に一回勤務先から在職証明を貰って提出しなければなりませんでした。この様な者達が出会うと「芸者並みにまだ年季が明けてない」などと話してました。

私の場合は、大学院を終わって立命に就職してから、五年の三倍十五年は、在職証明を3年に一回くらい出してました。そうしていた人が立命館大学にも何人もいました。もし大学を変ると、その都度変った先で在職証明を頼まなければならなかったのです。そういうわけで、物理に居た山崎君とは15年を終わった時、「やっと15年で年季が明けたあ」と言いあいました。

5 特別研究生の生活



小堀 憲 教授

特別研究生であることの義務は一切有りませんでした。責任があるとすれば、それは指導教授の方にでしょうね。もつとも、指導教授が報告書を書いて下さっていたかどうかは分かりません。

特に私が特別研究生になった時の辞令が「松本敏三と小堀憲の指導を受けること」となっていました。だから指導教授が松本敏三先生と小堀先生のお二人でした。その後2年目、3年目からは小堀先生お一人の名前で辞令が来てたかどうかはもう憶えていません。小堀先生が教授になられたのは、講座としては岡村先生の後ですが、岡村先生が亡くなられたのは23年の夏です。正式の記録ではひょっとしたら、24年かもしれません。それで松本先生のご定年とダブルのではなかったかと思えます。そのように松本先生

と小堀先生の連名で指導教授となっていたからには、岡村先生の後、小堀先生が教授になられていて、かつ松本先生は第一講座の教授としておられた時期があったのかも知れません。この時代は、定年退職の日が誕生日でしたから、その重なった期間の長さは

松本先生の誕生日に依ることになります。²

少々横道に逸れますが、教授の誕生日での定年退官に関わる私の思い出を一つ述べましょう。私は一回生の物理学通論の成績を受教簿に書いて貰う³のを放つといたんです。先輩が卒業までに貰えばいいんだからと言うものですから、ところが荒勝文策先生⁴が我々の一回生の終わりに定年になられるというので、「今貰いに行つて置かないとアカンぞ」と言われて、物理学通論の成績を受教簿に書いて貰いに物理学教室へ行った覚えがあります。私が荒勝先生の部屋を訪ねたとき、先生は一生懸命部屋を片づけておられ、「はよこんか!」と怒られました。荒勝先生は皆「優」やというので、誰も貰いに行つてないのです。荒勝先生のお誕生日は何時だったか知りませんが、ともかく年度途中でのご退官でした。

6 図書室のこと

我々の頃は、図書室の職員として助手の身分の人が一人居られました。大同さんといわれました。事務官である助手と教官である助手とが有つたわけです。そして事務官である助手はこの上（現在の305号室）に居られました。我々は誰が助手で、誰が副手か分かりませんでした。怖い人はこの上にいる助手の大同さんだけでした。その他にご夫人が居られなしたが、そのご夫人は亡くなった方の、あるいは辞められた方のご家族とのことでした。

階段を上がつたところ辺に広い部屋が有りましたが、私は卒業試問はその部屋で受けました。2回目の記事に書きましたように、控え室は3階の図書室で、試問のあとはその控え室へは帰れませんでしたが、大同さんの後任者が松谷さんという方でしたが、大同さんも松谷さんのどちらも怖かったです。

ついでに、卒業試問を受けた時のことを述べましょう。私の卒業試問はすこぶるレベルの低いのんびりしたものした。脅かされたこともあれば、先生方からかわれたりもしました。私は蟹谷先生から「スキュウな3直線に同時に交わる直線の作る線織面は知つとるか?」と訊かれました。当然線織面ですから、「それは一葉双曲面か二葉双曲面です」と答えました。そしたら「じゃ、どういう場合に一葉双曲面で、どういう場合に二葉双曲面になるか?」と蟹谷先生が訊かれた。私も怖いもん知らずで、「どういう場合にどうなり、どういう場合にどうなるかは分かりませんが、始めのスキュウな3直線の方程式に基づいてその曲面の方程式を作つて、2次曲面の分類に掛けたらできます」と言いました。そしたら、「えらい面倒くさいことを言うのやなあ」と言われたので、私は「面倒くさいかどうか知りませんが、そうすれば出来ることだけは確かです」と言うと、「えらい自信たっぷりやなあ」と冷かされたのですが、小堀先生横でヒヤヒヤして居られました。大体は、大学院で代数を希望した人は代数の事をという風に質問がありましたが、私は特に2次曲面とは関係なかったのですが。

話を図書室に戻します。私達の頃にはブロックというものがありました。それは大

²昭和25年(1950年)、昭和26年、昭和27年の京大職員名簿には松本先生が第三講座担当、小堀先生が第一講座担当となっている。昭和28年の名簿には松本先生の名は無い。伊藤清先生の名は、昭和27年の名簿には載っている。

³当時は、学生夫々が受教簿をもっていて、試験に合格すると、その先生の部屋を訪ねて成績を記入してもらった。卒業等は受教簿に記入された科目に依つて判定された。

⁴荒勝先生は1890年3月25日生まれ。昭和25年(1950年)3月25日で京都帝国大学を定年退官。

体 B6 位の大きさの木の板で、図書室の本をどなたかが正式の手続きを経て借り出すと、その本が有った場所にブロックと呼ばれた木の板に借りた人の名を貼って、本が返却されるまで置いておくのです。

私が院生であったとき Goursat だったか、要するに Borel 叢書の何かを借りたいと思って探すと、その本は借りられていて、ブロックが置かれていたのです。ブロックにある借り出しの日付を見ると、その借りている人が随分長期間占有していることが分かりました。ですから、事務官の助手である大同さんか松谷さんに「早よう返してもろて下さい」と言ったら、えらいこと怒られてしまいました。正当なこと言うてるのに何で怒られなければならないのかと思いました。

その本を借り出しておられたのは児玉鹿三という元三高の幾何の先生でした。秋月さん、小堀さんや湯川さん達の三高の時の先生で、本当かどうか分からないのですが、湯川さんに欠点を付けたとかいうということで知られていた先生だったのです。その児玉先生は三高の先生の時は、三高の教員としてこの図書室から借りることができのでしょう。その時に借り出されて、そのままだったんです。私は三高生ではあったとはいえ、児玉先生はずっと昔の先生でしたから、どんな方か知りませんでした。図書室で「早よう返してくれるように言うて下さい」と言ったら、小堀先生からもえらいこと怒られて、「児玉さんの怖いこと知らんなあ!」と言われました。先にも触れたように小堀先生も教えてもらった方でした。えらい頭の固い人で、新しい数学をご存知ならない藤原松三郎時代の先生でたでしょう、恐らく、湯川さんに欠点を付けたと言うことでしたが、岡潔さんにはどうだったか知りませんが、岡さんも習ってるわけです。

それから後に、児玉先生と私の間に皮肉な因縁が出来たのです。その児玉先生が三高を退職した後、立命館大学に行ったのですが、何かのことで末川さん（当時の立命館の総長?）と大喧嘩してしまいました。そのため教授会で初めてという退任決議というのに引っかかって、追い出されてしまったという話を聞いております。その空いた枠で僕が採ってもらった、私は立命館大学での児玉先生の後任という因縁が出来ました。

7 大学院生室

この部屋（現 205 号室）は院生室でした。私が大学院に入った頃は、溝畑、山口、松阪、河合さんといった私より上の辺の方々皆ここに居られたのです。



左より 前列：井村，三木，中井， 後列： 楠，滝沢，溝畑
場所：現在の 3 号館 205 号室，撮影：1951 年 11 月

昭和 25 年の職員録では、秋月先生が第四講座担当教授となっていますので、秋月先生は園先生ご退官の後を継いで代数の教授になられて間もない頃ではなかったかと思えます。教授になられるまえは秋月先生は三高の教授で、数学教室の講師でした。現在の事務室（101 号室）の所は、北側半分が事務室で、その次の個人割の最初のところが講師室となっていて、秋月先生はこの部屋を使っておられました。秋月先生が教授になられて、部屋を移られたそのあとに私と西田君が入りました。西田君は名古屋へ行く日以外はこっちへ来ますから、二人でこの部屋に入ったんです。すると秋月先生は「俺が居た名誉有る部屋やから汚すなや」と脅かされました。

8 就職するまで

私が院の 3 年か 4 年の時に、どなたが声をかけてくださったかは覚えていないのですが、「鹿児島大学に専任の口があるから、行かないか」と言われたことがあるんです。その時に、余りにも遠いからと言って辞退しました。結局は微分幾何の、今ではもう定年になられたはずですが、藤谷さん、藤家さんの、あの学年のどなたかが行かれたんです。その次に「教育大へいかないか」と言われました。教育大は受け入れの方向で動きかけていたんですが、そうこうしている内に、立命館大学からも先に書いたような経緯で、私に声が掛かりました。立命館大学には理工学部数学物理学数学科があるから立命館大学の方を選びました。

教育大には楠先生の同学年の坂下さんが居られて、それから新制の一期の方か、二期の方が行かれました。また、鹿児島大学へは幾何の橋口正夫さんが行きました。後年、鹿児島大学でシンポジウムがあったときは、その世話役やって下さっておりました。

9 海賊版

昨年（2016 年）11 月 19 日の同窓会の講演で、広中平祐さんは「秋月先生は扉が開かないと蹴り飛ばして入るような怖い先生だった」と言われましたが、私に対してはそう怖くはありませんでした。その理由の一つは、私は京大数学教室での海賊版の世話係で、秋月先生はその私から海賊版を買っていた時代ですから、私に対してはあんまり威張れない状況だったのです。更に、Hodge という人の Theory and applications of harmonic integrals という本を秋月先生自身が勧進元になって海賊版を京大から出したんです。実際の仕事は中野さんで、2 冊に分けたんかなあ、薄い全書版くらいの小さい本でした。それが京大として扱った唯一の海賊版だと思います。



秋月 康夫 教授

序でに言いますと、私が海賊版を扱うようになったのは森の責任なのです。森毅と東大の数学での同期に、座間という人がいて、彼が出版業者と協力して一手に海賊版の元締めをやっていました。全国の大学に売りつける為の窓口として、それぞれの大学に縁者を探していました。森毅が京都には知ってる奴がいると言って私を紹介したので、座間から私に京大での窓口になれと言うてきた訳です。

出版されている海賊版を教室の人々に周知するために、掲示板に広告を貼りだしました。掲示板というのも、あの及落のどる掲示板です。これは空いていることが多いのです。海賊版の情報が送られてくると、私とその掲示板に「こういう本が出来ました」との広告を貼っていたのです。そしたら大同さんに呼びつけられて、「こんな所に勝手に掲示をだすな」と怒られました。さらには、「研究室を使って金儲けをすることは何事か!」とも怒られました。実際は教室の先生方が皆海賊版を買っておられました。あの頃、チャントした本は高くて、先生方といえども手に入れることは難しかったのです。

我々の扱った海賊版を作るための元の本すら、本物ではなくて、所謂上海版だったのです。だから、我々が売っていたのは「海賊版の海賊版」ということになります。座間が“通称上海版”をどっからか手に入れて、それを元に上海版の海賊版をつくっていたのです。東大を軸として作っていたのですが、ある程度の数を作りかつ売らないとこの仕事は成り立ちませんから、各大学に連絡をつけて、販売網を構築していた訳です。

流石に図書室には海賊版は入っていません。先生方が個人で海賊版を持っていました。私は窓口をやっていた関係上、どの先生が払いが悪いのかもハッキリ分かりました。また、院生には札付きの払いの悪い奴も居て色々と苦勞しました。

私が、卒業研究一年目、昭和25年度から使ったWeylのDie Idee der Riemannschen Flächeも上海版ではなく座間の海賊版です。小堀先生以下全員海賊版でやってみました。代数のvan der Waerdenも海賊版になってました。ただその海賊版はずっと早くからあったので、あれはひょっとしたら上海版の別版だったかも知れません。

我々が三回生のとき、van der WaerdenのModerne Algebraの海賊版のことを誰かが教えてくれて、これを手に入れてセミナーをやろうということになり、私が秋月先生に「部屋貸してください」とお願いに行きました。我々の予想に反して、秋月先生に怒られて、「学生だけで本を読むことは禁ずる」と言われました。つまりいい加減な勉強をして、何が正しいかが分からんようなことになるのは良くない、ということなのでしょう。「勝手にやるのはいかん、部屋の使用許可は出さん」と言われました。

まあ、下宿持ち回りでもやれということでしょうね。そういえば教室に空いてる部屋はなかったかもしれません。助手の方々も二人一部屋でしたから。

勉強をするための本は概ね海賊版という状況でした。例外は、この前回にも書きましたが、蟹谷先生の講義のプリントがありました。蟹谷先生の講義が余りに難しいから、先生にノート借りて吉田神社の前のプリント屋へ持って行き、謄写印刷にしてクラスに配りました。射影幾何学特論で、接続の話でした。海賊版以外といえばそれ位でしょうね。秋月先生は例のA. WeilのFoundation of geometric algebraを自慢しておられたけど⁵、流石にあれを教材にされることは無かったんです。

10 友人たちとの勉強のことなど

10.1 三高時代の森毅との勉強

まず、大学院の時代の話ではなく、三高の時に友達とした勉強の事から始めます。私は三高では、勤労働員⁶で、現在はユニバーサルスタジオジャパンとなっている場所にあった工場へ行きました。しかし、工場には行っただけでも、私は現場では働かなくて良かった

⁵同窓会設立報告号78ページ参照

⁶準備号の楠先生の記事のなかに、勤労働員の経験が記されている。

たんです。“29 稀”⁷に書きましたけど、森毅と私と、教養部の物理にいた幡野という男、それから大学は美学に行ったという変わった男の木幡の4人が現場には駆り出されず、研究班と称して特別の部屋で実験をしておりました。飛行機の桁を作り出す金属の塊、インゴットをどういう成分にしたらどういう桁材が出来るかを調べる仕事です。工場の専任職員であったか、あるいは技術将校かであった東大の航空学科を卒業した人の指導で明けても暮れても、ストップ・ウォッチを片手に持って実験をしておりました。

インゴットの成分をどう変えたら、出来る金属の強度等の特性がどなるかという計測をやるのです。実験の精度を上げるために、夜も勉強しておけというので、工場の寮のその4人の部屋だけは終夜明かりを付けていて良かったんです。

私がこの4人に入ったというのも、特別に成績が良かったというわけではないのです。三高には得意の自治組織があって、寮の行政を担っているメンバーが4人位居たのです。彼らは、私達にとっての本当のボスなのです。そのボス達というのは、後で法政の教授になりジャーナリズムでも有名になった男とか、英文の教授になった男がいました。行政のボスというのは文系の連中なのです。勤労働員に関わる工場との折衝もボス達がやるわけで、我々4人はそれらのボス達との関係で選ばれたのです。4人は一日中実験をしていて、消灯は無かったのです。それを良いことに森毅が「4人でセミナーをやるう」と言い出しました。彼の親父さんが沖電気だったかどこかの電気会社の重役でした、大学は何処であったかは知りませんが、工学部出身にも関わらずその親父さんが旧版の岩波講座の「数学」を持っていたんです。そして森が能代先生の書かれた集合論を持ってきました。森と私のほかは、一人は物理へ行き、もう一人は哲学へ行ったような奴ですから、本当に対応したのは二人だけでした。能代さんの集合論を森が全部チューターでやってくれたわけです。

10.2 戦後に森と Bourbaki を学ぶ

これは戦後に、森が北大へ助手になって行っていた頃の話です。彼は10月に石炭代を一年分もらい、そのお金を持って東京へ帰ってきました。北大では助手ですから勉強さえしていたら良い訳です。森と西田とは小学校の時一緒だったのです。西田は浪高に四修⁸で入っているのです。森は旧知の西田と私に目を付けて Bourbaki の勉強を持ちかけてきました。どこかに集まって Bourbaki を一緒に勉強しました。場所は思い出せませんが、三高の同窓会の部屋だったか、あるいはこの数学教室のどっかを使かったのかも知りません。このときの勉強について、森は後で、彼の沢山ある著書になかのどこかに書いておりました。それには、“これこれこういうことを始めたが、何ヶ月かで潰れた”という感じに書いてあり、如何にも西田と僕が勉強しなかつたと臭わせていますが、それは正しくないのです。僕は Bourbaki の Fonctions d'une variable réelle の勉強から随分と利益を得たのです。Boursier の試験を受けた時に、試験官であられた弥永先生の口頭試問が Fonctions d'une variable réelle に関するものだったのです。「それなら知ってるわい」というものでした。

⁷昭和29年3月の卒業生の会“ふくます会”の会誌。1999年に創刊号が発行され、15号まで毎年一号ずつ発行された

⁸旧制中学は就学期間は5年間であったが、4学年を終われば高校受験が出来た。

10.3 奥川先生のエピソード

森毅とは腐れ縁の仲でしたが、彼との関係で僕は数学へ行く決心が付いた面があります。しかし、次の話は森とは無関係のことです。

三高にいたころ、「数学研究会」と称する会を打ち上げました。そのときに小堀先生、秋月先生を頼って蟹谷先生から数学教室の二次曲面の模型を貸してもらい、2次曲面の分類的な話をさしてもらいました。これは戦後になってからです。この活動が僕が数学科へ進む一つの切っ掛けだったかとも思います。なにしろ当時の旧制高校で“数学科”のイメージは無いんです。昔は数学科には定員だけの学生はいなかったのです。数学科に進むのは余程の人だけでした。小堀先生、秋月先生は余程数学が好きだったのでしょう。図書室に関する話で触れた児玉先生は頭の固い人でしたから、児玉先生の影響で小堀さんや秋月さんが数学を選んだとは思えません。岡さんの影響かもしれない。岡先生に Goursat を教えたのは誰なのでしょう、高木先生なのか、その辺は私には一寸分からないのです。

私に Goursat を勧めて下さったのは、奥川先生です。それに関わる面白いエピソードがあるので紹介しましょう。奥川先生は三高では、クラスの担任ではありませんでしたが、数学は習いました。どういう訳だったかは思い出せませんが、僕は奥川先生の所に良く出入りするようになりました。更に、三高を終え数学科に進学してからも奥川先生には一回生で立体解析幾何学のとその演習の両方を習いました。

奥川先生には数学研究会でも色々世話になりました。僕は数学へ行く決心してから、「どんな数学の本をよめば良いでしょうか」と訊いたら、Borel 叢書の話をして、それで Goursat だったか Julia だったかを勧められました。これに関連して奥川先生らしいエピソードがあります。私が先生のお家へ行った時、「君これ読んでみいへんか」と言われました。奥川先生ご自身もこの本で勉強されたと言われ、そして僕に「三木君、この本の何処とどこが面白いぞ」と話されながら先生ご自身の本を手渡してくださいました。悲しいかな、その本はフランス綴じでした。そのフランス綴じのページは未だ切られていませんでした。それで奥川先生真っ赤になられました。「俺が読んだから、貸してやる」と言われたのに、ページが切られてない本では、先生が読まれてはいないように見えます。先生が嘘をつかれた様に見えかねない場面で、奥川先生はお気の毒にも、如何にも先生らしく赤面せられて、「僕は教室のものを読んだから」とおっしゃられました。それは本当でしょう。先生は教室のものを読んで興味を持たれ、それでご自分で原本を手に入れられたばかりの所だったのです。

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私 (3)

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

1. 本部逆封鎖

無期限ストに入ってもなくである。まだ寒かった記憶がある。学部が上がってからの私は、午前中の授業がない日は朝10時頃に起きて登校の準備をして、11時頃に登校途中の学生食堂で朝・昼兼用の食事をとってから登校した。ストライキに入ると、当然授業がないので毎日このパターンである。

ある朝10時前に起きると、良く通る拡声器の声で何か呼びかけている。内容は良く聞き取れないが、大通りから叫んで、百万遍の角から西北西に入って京大女子寮の前を北に50メートルほど上がったところにある下宿屋まで澄み通った声で聞こえるからには、よほど性能の良い拡声器である。こんな性能の良い拡声器は警察か民青か民間の会社か、と思ったが、朝からやかましいことだと、内容までは注意を払わなかった。身支度をして行きつけの明美食堂で朝昼兼用の食事をとって食堂から外に出ると、初めて拡声器が何を言っているのか耳に入った。「みなさん、みなさんの力で京都大学を守りましょう！」と言っている。聞き覚えのある奥田東総長の声に違いない。これはただ事ではない。とにかく、本部の百万遍の角の門まで行くと、膨大な量のベニヤ板で本部構内の石垣に内側からバリケードが築かれていた。検問をしているが、「京大生だ」と言うとながら中に入れてくれた。中に入って誰彼に聞くと「教養部を封鎖している全共闘の学生が、本部構内ではすでに学生部を封鎖しているが、本部構内の全面封鎖を目指して攻めてくる。さらに、東京から日大全共闘が3台のバスに分乗して応援に来る。すでに出発して名神(高速道路)に入ったとの連絡があった。この暴挙を許してはならない。一般学生・教職員で京都大学を守りましょう。」とのことである。それはいけない、と思ひ、見知った者もいたので一緒に本部の石垣を守るべく配置についた。どこの配置につくか明確な指示はなかったが、本部の長い石垣のすべてにそれなりの人員が配置されるほど、中の人が多かった。昼少し前であったろうか、京大全共闘が本部正門を襲撃してきたが撃退した。私は離れたところを守っていたので、ただ攻防を見るだけであった。その襲撃を撃退すると、あとは何もやってこない。確か、にぎりめしと飲み物の支給があったと記憶するが、それらを飲食した後は待てども待てども何も来ない。名神をバスが時速100キロで走ると、とうに着いても良いのにと思ひながら、緊張して待ち続けた。武闘などしたことのない私は何の防具も無しで襲撃に備えて待ち続けていると、とても緊張し疲れた。(小中学校時代に剣道はしていたが防具を着けるしルールがある。)さすがに薄暗くなって、もう今日中の再度の襲撃はないであろうと思える頃になって、中の学生が三々五々自然解散を始めた。

そのとき、誰かが「学生部の封鎖を解除しよう！」と言って、手回し良く消火栓にホースをつないで開栓した。消火栓の水圧は高いと聞いていたが、ホースを持っていた人ははじき飛ばされた。私は、自分では農作業をしたことはないが、そのような力仕事は見て育っている。あのようなへっぴり腰ではだめだ、と見て、ホースを取って腰に構えて学生部に放水した。放水しながら、「こんなことは予定になかったではないか、何かおかしい。学生部の中の学生はガスも電気も絶たれた中でさぞかし寒かろう。」と思ひ至って「やめた」と言ってホースを投げ出した。

ちょうどそのとき、学生部の封鎖側の学生が、学生部の建物から出てきた。出てくると同時に、「不当封鎖解除を弾劾する」と言って法経1番教室（今の本部時計台下の百周年記念大ホール）で総長団交を始めた。私には訳が分からなかった。封鎖側の学生がなぜ堂々と総長団交を要求し、総長がそれに応ずるのか？封鎖学生側は総長に謝罪を要求するが、総長は何も答えない。それがしばらく続いた後、医者が入ってきて「これ以上の継続は総長の体調からして不可能」とか言ったらしい。驚いたことに封鎖学生側は「逃げるな」とは言いつつ唯々諾々と総長の退場を見送った。後から聞くと、人命に障りがあるといけないから、あらかじめどこで団交を打ち切るか決めてあるのだそうだ。このとき初めて「ボス交」という言葉を知った。封鎖側にいた教養部3組の同級生で物理に進んだ友達が「騙されましたね」と言ったのが強く印象に残っている。

確かに、この一日には「嘘」が満ち満ちていた。「日大全共闘」を筆頭に、つじつまの合わないことだらけであった。私にはっきりしているのは、総長サイドと民青系（生協・職組も含めて）が共同戦線を張り、全共闘学生に反撃するために“一般学生”を巻き込んだことだけである。

この“京大逆封鎖”は京大史上、どのように記載されどのように評価されているのだろうか？私が見聞きしたことはあまりにも部分に過ぎて、個人的結論を出すこともできない。

このできごとは1割の「あくまで京大を守れ派」、1割の民青シンパを確定させたほかは、8割の全共闘シンパを生み出したのではなからうか？その後の数日のできごともあって私は「全共闘シンパ」になった。

では、なぜ私は全共闘そのものに参加しなかったのか？先に触れたように、私は小学校の4年から、病気でドクターストップがかかる中学2年末まで剣道をしていた。日本の武道は「道」である。技術の前にまず「正々堂々と闘え」という精神を学ぶ。「正々堂々」とは「己が成したことは己が成したと認めよ」ということである。その立場からは投石という「投げた石が誰に当たりどのような怪我をさせたか分からない行為」は受容できない。

もう一つ、東大の安田講堂攻防戦で多くの強力な火炎瓶が機動隊の上に落とされた。機動隊も人間である。どのような人に対しても人命に関わるようなことを仕掛けるからには自分の命も差し出す覚悟が必要である。私は、今はまだそういう時でない判断していた。

[思い出： デモ]

逆封鎖の前にもおとなしいデモに参加したことは何度かあった。しかし、逆封鎖の翌日、全共闘系のデモで百万遍の交差点で渦巻きデモをした。百万遍の交差点は十分広かった。この広い交差点を自由に渦巻くのは開放感があって快感であった。この後、全共闘系のデモに参加することが増えた。それで、大阪で知っているのはフェスティバルホールに加えて扇町公園と御堂筋の車道となった。御堂筋の車道でフランスデモ（もちろん無届け違法）をしていたときである。デモに対峙して規制の機動隊が進んできた。「逃げるな対峙せよ！」との檄が飛び先頭から2列目であった私たち4人は堅くスクラムを組んで踏みとどまった。しかし、なんだか後ろがスースーする。振り返ると100メートルを超えて続いていた隊列は跡形もない。2列8人が脱兎のごとく逃げたのは言うまでもない。

フランスデモ・渦巻きデモを通じて私は「解放された広場の思想」を持つにいたった。

2. 全体集会、その後

もちろん団交の全体集会ではスト破りの責任問題が追及されたが、日頃から教員と親しくしていて、誰が何を考えているかほぼ分かる状態だから、教官団としての謝罪も、試験を強行した教官の個人的謝罪も出てこないことは分かってしまう。それで決裂だ・封鎖だといけば全共闘的なのだが、そうはならなかった。教官側が「謝罪はしないが、いい機会だから君らの不満を聞きたい」という態度であったから、「これ以上の議論は無駄である」と宣言して決裂する構図には嵌らない。

そうこうしているうちに、数学科闘争委員会の学生諸君は政治闘争に忙しくなり教室に来なくなった。全体集会で教官団と対等に渡り合うためには誰かが中心にならなければならない。ストを打ちながら何もしないことは学生自治の空洞化である、との認識が私を含めた数人であった。仕方がないから“再建数学科闘争委員”を結成した。とは言っても、ほんのこの間までノンポリの典型だったものが数人集まっただけだから内容に乏しいことは仕方がなかった。「何とかしなければ」の気持ちだけであった。私や竹本君・山西君・高田君などがいて、少し離れて伊吹君がいた。“再建”が付いているとはいえ、“闘争委員会”を名乗ったのは、構成メンバーが全員、どちらかという全共闘シンプであったからである。“闘争委員会”を名乗る以上、数学科闘争委員会・理学部闘争委員会・京大全共闘に何か断りを入れなければいけないのではないかと、とはつゆ思わなかった。自然発生的・自主的・一方的なところが“闘争委員会方式”である。

結成した以上、機関誌くらいは出さなければ、というので各自が数学科内外の現在の問題について文章を書いた。政治の素人達だから集団としての綱領を定めたわけでもなく方針を統一したわけでもなく、単なる各自の感想文だったり決意表明であったりの寄せ集めで、親睦の文集みたいなものであった。私の文章は覚えていないが、竹本君の文章は先鋭で、これは武力革命しかないと思わせるものであったが、なぜか結論だけは「みんなで仲良くしましょう」であった。なんぼなんでも論理が通らないのじゃないかと聞くと「結論の前まで書いたら怖くなって、結論はそれまでの論理と切り離して穏便にした」とのことであった。機関誌のタイトルを「乱波」として、作った以上売ろう、と行って1冊50円（価格の記憶は定かでない）で売り出したら、理学部闘争委員会の顔見知りや友人がご祝儀代わりに買ってくれた。40数冊以上（売れた冊数も定かでない）売れて、2千円余の収入（収入金額の概数は記憶にある）があった。“闘争委員会”を名乗る以上、デモくらいはするであろう、デモをするのに旗がなければしまらないから旗を作ろう、ということになって、同級の女子学生の手を煩わして粗末ながら旗もできた。それにデモ指揮用のホイッスルも買ったが、まだ2千円ほど残っていた。

団交の全体集会では始めは授業のあり方などに不満を述べていたが、良く考えを煮詰めているわけではなかったから、冷静かつ公平な発言とは言い難かった。授業への不満を言うことにも行き詰まると、自然に日頃から考えていて結論のでない話題に移っていった。曰く「数学は自然科学か？」である。こういう飛躍は数学に浸っている数学教室ではそれほど突飛な気がしないが、他の学科の学生には理解不能であったようである。数日おきにこういう議論をしていると、“闘争委員会”を名乗っているからには自分たちの下部組織であろうとの意識があったのか、理学部闘争委員会から、「お前等は何をしているのか？今は政治の季節（70年安保）だぞ」と文句を言ってきた。こちらも「政治の季節であることは分かっているが、気になることは気になるのでこっちの議論もおろそかにはできない」と回答した。それで引っ込んでくれるところが全共闘であり理学部である。

3. 理学部事務室封鎖

理学部の学生大会が開かれることになった。(学生大会はこのころしょっちゅう開かれていた。)この学生大会に理学部闘争委員会が独自提案を出し、民青側の多数で否決されるのを潮に理学部事務室を封鎖することになった、と一応闘争委員会を名乗る我々にも連絡があった。ところが、学生大会で理学部闘争委員会委員長の沼田君が独特のダミ声で演説すると、大会の雰囲気は理学部闘争委員会提案支持に傾いて、提案が通ってしまった。これで封鎖は中止、よかったよかったと友人と晩飯を食いに行った。戻ってくると、理学部闘争委員会のメンバーが「何をやってるんだ！」とくっついてかかる。聞いてみると、理学部闘争委員会も「封鎖は中止」と考えていたが、応援に頼んであった文学部闘争委員会の一隊が北部の南側今出川通りに覆面ゲバ棒の正装(?)で整列して待っていて「すべて準備済みなのにこのまま帰るわけには行かない」と譲らず、結局やっぱり封鎖することになっててんでこ舞いだとのこと。何か手伝わないといけないのか、と思ったがすでにあらかた封鎖は終わっていた。講義用の机と椅子が一体になったものを針金で実に堅固に組み上げてある。文学部の学生は工学部建築や機械の学生より建造物構造を熟知しているのではないかと舌を巻いた。

封鎖されて物がなくなった事務室の2階に落ち着くと、封鎖につきものの旗の掲揚がない。理学部闘争委員会の旗はどうした、と聞くと、昨日のデモで機動隊に取られた、とのこと。旗がないと雰囲気が出ないから再建数闘の旗を貸してやることにした。かくして、翩翩と「再建数学科闘争委員会」の旗が封鎖事務室に翻った。

一息ついていると、事務室の前に理学部長一行が来て、拡声器で「君たちの封鎖した事務室の地下倉庫には金属ナトリウムが保管されている。金属ナトリウムに衝撃を加えると大爆発するから、くれぐれも注意するように。」とのことである。封鎖した側が金属ナトリウムに衝撃を加えることは考えられないが、いずれ封鎖解除に機動隊が導入されたら、放水車での強力放水の衝撃や、水と金属ナトリウムの接触が心配される。手回しのいい学生が、封鎖解除の際の抵抗用に石をバケツに数杯分運び込んでいたが、衝撃につながる投石などとんでもない、となって、ただただドン亀のように首を引っ込めて無事を祈るだけとなった。

エライことになったなと思っているところに、民青系の学生が封鎖解除にやってきた。「全共闘の学生は暴力学生」と非難する割には彼らは平気で投石してきた。彼らも理学部長の警告を聞いていたはずなのに。実に珍しい、民青系が雨霰と投石し、全共闘系学生がひたすら何もしないで堪え忍ぶ、という光景である。そのうち、民青系学生がバリケードの前面の金属ロッカーを引きはがしに掛かった。これをはがされるとバリケードは崩壊する。必至で内側からロッカーを引っ張って抵抗した。そのうち、民青系学生があきらめて引き返したからよかったが、ロッカーを引きはがされて乱入されたら事務室内での大乱闘で金属ナトリウムの大爆発もあったかもしれない。

ロッカーを前面とするバリケードも再構築・強化して一段落。やれやれと思っていると、事務室の電話が鳴る。封鎖事務室にどなたが御用?と訝ったがとにかく出た。出たとたんベロンベロンの酔っ払いが「その声は松本か!せっかく俺が5年かけてやっとまとまるはずだった“博士課程3年在籍で自動的に博士号を出す制度”がご破算になった!どうしてくれる。しかし、あの制度も変ちゃ変だから、まあ、いいか」と寺本学生部長の声である。これには封鎖の前日のことを話さないと意味が分からない。封鎖の前日、理学部構内を歩いていると学生が学生部長団交をしている。テーマは“博士課程3年在籍で自動的に博士号を出す制度”である。オーバードクター問題解決のために、博士課程3年在籍で自動的に博士号を出すように制度改正する、というのである。団交は数度にわたり積み重ねられてきているようで、まさにこの制度が最終合意案として確定する寸前であった。私は発言を求め、「研究者としてやっていけるというお墨付きを、単に3年間在籍したというだけで与えるのは、博士号の趣旨を大きく逸脱する。もしこの制度を採用するのであるならば、京都大学理学部の博士号は、自立した研究者に与える

称号ではないことを公表してからでない、言葉は悪いが詐欺行為に当たる。」と言った。そしたら、学生の雰囲気が変わって、この案は見送りとなり、議論は振り出しに戻った。このことを寺本先生は言っているのである。電話の向こう側がひとしきりしゃべると、電話は一方的に切られた。この寺本さんと龍谷大学理工学部数理情報学科で同僚教授として勤務することになるとはそのときは思いもしなかった。寺本さんの授業を受ける機会はなかったが、同僚として働く中で寺本さんの人としての懐の深さを実感し、影響を受けた。この時代の教授は「大物」が多かった。

さて、理学部事務室を封鎖した翌日の昼頃に訪問してみると、昼食の握り飯を分配しているが、「貯金がないからにぎりめしは有料」とのこと。「なんだい、封鎖中は資本主義かよ」の声がむなし。先まで見通していないところが理学部的かもしれないが、金属ナトリウムに不安を抱きつつ封鎖を守っているメンバーがかわいそうだ。それで、怪しい機関誌でもうけた2,000円を仲間の了解の下に供出して握り飯の差し入れをすることにした。1回で終わりの差し入れだが、2,000円の使い道としては悪くはないと思った。もともと、ほとんど彼らからいただいた金だから。

翌日、またもや学科の女性陣にお願いして米を買い出してから封鎖中の教養部に赴いた。封鎖中の教養部のA号館の事務室があった所に大きな竈と釜が3組しつらえてあるのを知っていたからである。もとより、封鎖している教養部共闘会議に知り合いはいない。竈の部屋に行くと、いかにも牢名主的な学生がゲバ棒を持ってのんびりしている。「すみませんが封鎖の差し入れの握り飯を炊きたいんですが、釜を貸してください」というと「いいよ〜」と鷹揚な返事。結局、握り飯1個だけ「通行税」と言って食われたが、のんびり米を炊いて握り飯を握ってハイキング気分であった。

[思い出： 解放区]

封鎖中の所は皆、「解放区」を謳った。京都大学内の最大の解放区は教養部であった。ストライキを打っているからには一度は「解放区」に行ってみなければと、スト入り後しばらくして訪問した。教養部正門は堅固なバリケードが組まれていて、一人一人通れる通用門があって、そこで検問を受けた。「京大生です」と言うのと通してくれた。その後、経験を積んで分かるようになったが、本物の学生と学生に化けた私服警官は区別がつく。検問は私服警官を分別しているようであった。

中に入ると、教養部時代に親しくしていただき「数理統計学」を教えていただいた小針先生が、昔の軽妙な姿と打って変わって、学生もいやがる安ウイスキーのサントリーレッドの大瓶を下げてベロンベロンに酔っ払ってやってきた。私の姿を見つめるやいなや「まつもとー。お前も飲め」と言う。昼間から酒を飲む習慣はなかったので「いや、いいです」というと「ならば俺が飲む」と言って大瓶からラッパ飲みである。何が小針さんをこんな追い詰めたのかと気になった。(不安は的中し、それから1年半ほどして小針さんは亡くなった。岩波書店の「確率・統計入門」の広中さんによる「序にかえて」を一読して欲しい。)

バリケードの中を見て回ると、最小限の物資補給があれば自立して生活できるように整っていた。先に触れたように竈もあった。私はその後も何度か訪れたが、私が訪れたときはいつもいたって静かであった。あるときは、ぼったり森毅さんに会った。若い学生と歩いている。「君も来ないか」というので聞いてみると、予備校闘争委員会が「公理主義とは何か」を論争したいと言うので論争に行くところだとのこと。森さんにもう一人老人が付いている。あとで清水達雄さんと知った。A号館の屋上で車座になって議論を始めた。問いは「公理主義の感覚は何か？」である。森さんが「僕はコリコリやと思うなー」というと予備校闘争委員会のメンバーが「ナンセンス！グニャグニャだろうが」と反論する。この調子で続いていく。いささか疲れた頃に突然清水さんが持ってきていた風呂敷を広げて「私は最近、忍者を研究しています」と言う。そのあとどんな話をしたかは思い出せない。

4. エデンの北

理学部事務室封鎖に比べて、数学教室は穏やかな日々であったが、全学は逆に対立が先鋭化して、いわゆるゲバルトが多発した。ゲバをやっているらしいと下宿で気がついて大学に駆けつけても、大概是事は終わっていて、お互いが相手が悪いとの非難演説をスピーカでがなっているだけである。しかも、相互の主張がまるで逆である。どちらも「相手側が仕掛けた」と言うのである。これには困った。それで、覚悟を決めて数学教室に住みついて、ゲバがあると即座にこの眼で見に行けるようにすることにした。その当時、娘さんの家庭教師をしていた元教養部学生部長の作田先生の奥さん（作家の折目博子さん：故人、作田先生も昨春他界された）にお願いして使っていないマットと掛け布団各1をいただいた。数学教室のリアカーを借りて、それらを第5講義室（今の談話室）に運び込んだ。長机を4つ並べて、ベッドとしてマットと布団を敷いた。夕方の5時を回ると、数学教室の扉はすべて施錠されるので、南面の窓の下に木箱を置いておいて、夜は窓から出入りした。ゲバを見に行っている間は窓は施錠されていないから不用心ではある。この教室の窓に「エデンの北」と紙に書いて張った。

もちろん、主任の吉沢先生から退去するように、との申し入れはあったが、無視して住みついた。合わせて、主任から「封鎖事務室に再建数闘の旗が掲げているが、再建数闘が封鎖したのか？」「エデンの北の“エデン”とは教養部のことか？」と問われたので、前者は「旗を貸しただけ」後者は「“エデン”は封鎖事務室のことだが、大きな意味はないから気にしないでください」と答えておいた。「エデンの北」は、映画「エデンの東」が好きだから、適当にもじっただけである。もちろん、ジェームス・ディーンの演技が下敷きにはあるが。主任には数学教室の教員からではなく、理学部他学科教員からの突き上げがあったようである。

夜は数学教室に泊まり込むのだが、昼間は仲間の学生と意見交換したり全共闘系の集会やデモに参加していて結構忙しかった。1日のすべてが終わって晩飯を食うと、もう午前0時になることもしばしばであった。午前0時になると封鎖中の農学部の建物から拡声器で高らかに中華人民共和国の日本向け放送が流れる。インターナショナルの歌の器楽演奏の後に独特のイントネーションで「こちらはペキーン放送。偉大なる我らの領袖毛主席は…」と始まる。ここまでは毎日同じである。で、ここまで聞くと「ああ、今日1日も暮れたか」という感慨に浸って寝屋に帰るのである。もちろん、夜間にゲバがあると、直ちに跳ね起きて現場に急行する。のんびりとは眠ってられないのであるが。

[思い出： 深夜放送]

大学に泊まり込むようになると、のんびりラジオの深夜放送を聞いてもいられなくなったが、平時には深夜によくラジオを聴いた。FMの受かるラジオを持っていなかったので中波ばかり聴いていた。お気に入りの3大番組は1位：KBS 京都「葵書房提供、聊斎志異」である。中国の奇異な話の朗読だが、「リョウ・サイ・シイ」の声だけが女性で、朗読はおっさんである。そのおっさんが、たおやかな美女の声を真似るのが、なんとも不釣り合いでおもしろかった。2位：題名は忘れたが、KBS 京都のリクエスト番組で、桂米朝がディスクジョッキーをしていた。その番組に和漢の古典のパロディーを投稿する者がいて、米朝が原典を当てるのである。私が知っているような枕草子とか徒然草とかではない。もっとマニアックなものを原典に選ぶから、実のところ、米朝が「ははー、これは明の…の…ですな」と言っても当たっているのかどうか分からない。それでもおもしろかった。投稿者の第一人者「衣笠山の狸坊や」は今どうしているのだろうか…。3位：ABC 朝日「ABC ヤングリクエスト」普通のDJ番組だが、テーマ曲が番組開始以来使い込んですり切れたテープで、弘田三枝子の元はパンチの効いていたはずのかすれ声になんだか親しみが持てた。

ラジオといえば、思い出すことがある。後に数学教室の助手にしていたが、居室は2人の相部屋で、何度か相棒が替わり部屋も替わった。3番目だったと思うが、磯

崎君と相部屋になり、かつては地球物理学科がいた、数学教室旧館の北側の2階にある部屋に移った。隣が池部先生の部屋で、昼の12時になるとNHK第1放送「ひるのいこい」が、こちらの部屋で明瞭に聞き取れるくらいの音量で鳴り出す。「今日の農事メモ」で「4月の満月を過ぎたら…の種を蒔きましょう。畝は高くして藁を厚めに敷きましょう」などと聞こえてくると、田舎育ちの私はうれしくなった。しかし、この北翼は南翼とは比べものにならないほどおんぼろで、廊下の窓など開けようとする窓枠ごと下に落ちそうになるので開けられないものが過半であった。こんなに差があるのは、地球物理が有毒ガスを使った実験をしたので鉄金具がボロボロになったのかと思った。実は、戦前建設の南翼と違って、北翼は戦後の建て増しで、きわめて貧弱な予算で建てられたので、南翼より質ががたんと落ちるのだと、後に井川さんに聞いて得心した。

[思い出： 漫画]

私にとってこの頃の娯楽はラジオと漫画であった。漫画は当時の風潮になびいて劇画である。雑誌「ガロ」はかなり長い間途切れることなく購入し、今も宝物として書棚にある。「ガロ」と言えば白土三平の「カムイ伝」であるが、私が読んでいた頃は少し中だるみであった。“マルクス主義を描いた漫画”との評判に作者が飲まれたような印象を受けた。私はむしろ、つげ義春、滝田ゆう、つりたくにこ、勝又進などを好んだ。そのくせ、林静一もいいと思っていたから、適当なものである。手塚治虫の「コム」は劇画と違った「大人の色気」を打ち出したが、長続きしなかった。当時は漫画を読むのは若い世代で、「大人の色気」ならばいっそ「エロ」を望んだので、コムでは中途半端であったのではないだろうか？

数学教室のストの合間に、こんな調子で漫画を語っていたら、2・3年上の劇団を主宰している前田さんが「オマイサンは何を語っても論だねえ」と言った。「オマイサン」と呼ばれたのも初めてでびっくりしたが、そういえば私は何を語っても論じてしまう。未だにそうだ。

5. 法経第一教室襲撃事件

そんなある夜、本部構内から「ウォアー」という叫び声が聞こえてきた。飛び起きて外に出て着ると本部時計台あたりに高く火の手が上がっている。駆けつけてみると、全共闘系の学生が法経第一教室（今の本部時計台下の百周年記念大ホール）を建物の外から取り巻いて火炎瓶を投げ入れたり棒で突いたりしている。火炎瓶が教室の中で破裂すると高く火炎が立ち上る。後で知ったのだが、全共闘系学生が時計台を封鎖するとの情報を得た民青系学生が、時計台死守のために法経第一教室に立てこもり逆封鎖した、そこで全共闘系学生が逆封鎖解除に押し寄せたとのことであった。私のほかに駆けつけた10名程度の者の前で、その攻防はなにか別世界のここのように淡々と続けられた。

しかし、誰かが119番に通報したのであろう、パトカーでも機動隊でもなく救急車が到着した。そのとたん、攻防は止み、法経第一教室内から一人の人が担架で運び出されてきた。後で聞くと、火炎瓶が顔を直撃し、失明したとのことであった。それがきっかけとなって全共闘系学生が消えていって静寂に戻った。

こんな激しい衝突はこのときだけであったが、そこその衝突は何度かあった。あるときは、夕方、なんかの用足しの後、知恩寺の東側の塀沿いに自転車を走らせていたら、寺の北側の塀沿いに、黄色いヘルメットと規格のそろったゲバ棒で武装した50人ほどの白衣の集団が整列していた。しかし、さいわい、その夜は何も起きなかった。ある理学部闘争委員会のメンバーが、「松本さん、全共闘のゲバ棒はその辺からかき集めた看板用の安い棒ですが、民青のは規格がそろった樫の棒ですよ。これが元軍人に教練を受けているのだから、とても対等のゲバにはなりませんよ」と言ったのが思い出された。当否を確かめるすべはなかったが、「規格のそろった棒」というところは当たっていた。

全共闘側も「武闘勝利」を叫んで、ゲバ棒を持ってドラム缶を突き倒す訓練をしたことがある。デモの途中で突然訓練をすと言い出したので、やむなく参加したが、「竹槍

で鬼畜米英を倒す」太平洋戦争末期の精神構造と同じ気がして嫌であった。その後はそのような訓練につながるような雰囲気的时候はデモに加わらなかった。

このような生活をしていると、秋になるとさすがに疲れを覚えるようになった。

理学部闘争委員会の1年下の数学志望のメンバーが数学教室の第1講義室の東隣の小さな部屋を拠点にしていた。彼らは疲れ切っていて、この部屋に戻ると椅子に座ったまま眠りこけるのが通例であった。ストライキに入ってすぐの頃、翌日まくビラ原稿書きの当番がたたき起こされて起草し始めた。あきれたことに誤字だらけである。いくら理学部といってもこれはひどすぎると、不快に思った。しかし、泊まり込みを初めて数ヶ月たって、私も疲れがたまってくると、原稿を書きながら眠ってしまって、目が覚めて読み返してみると、恐ろしいほど誤字だらけであった。そのとき、あのときの学生はこの状態だったのだと思い当たり、人はそんなにも疲れ果てられるものかと暗い気持ちになった。

後に、龍谷大学に移ってからバブル崩壊後の学科の就職主任をしたとき、夜毎に学生に電話して相談に乗っていた。帰宅すると午前0時を回る。疲れ果てて味噌汁碗を持ったまま眠ってしまって全身びしょびしょになったことが再三あった、あのときも疲れ果てていた。その後、学部の要職を兼任していた折りに、主催する研究会のプログラムを、講演者の希望に添って組み直していたときも何度かキーボードの前で眠ってしまった。努力の甲斐あって、なかなかうまく納まらなかったものがすっきりできあがった。実は居眠りしたときに気づかずにデリートのキーに触れて一人分の講演タイトルを消去してしまっていたのだ。研究会が終わってから「どうして僕の講演は最終プログラムの段階で消されてしまったの？」と抗議されて、平謝りであった。そのときは言い訳になると思って言わなかったけれど、こういういきさつであった。この場を借りて改めてお詫びする。「疲れ果てる」ということは、本当に良くないことである。「過労死」という言葉は私の心を強く揺さぶる。

それにしても、キーボードに向かったまま眠ってしまうと、指がキーボードに触れたままになって同じ文字が20個も並んでしまうことがある。zzzzzzzzzzzzzzzzzzzz.....となったときは、思わず笑った。

京都大学定年退職に際して

追 想

名誉教授 上田 哲生

1974年3月学部卒業

1976年修士課程修了

今年三月をもって京大を定年退職しました。退職の少し前に井川先生から、同窓会誌に文章を書くようにという御依頼があり気安くお引き受けはしたのですが、古いことは記憶も曖昧になり皆様の御参考になる話もできそうにありません。ただ、どんなきっかけで数学をやるようになったか、どんなことを面白いと思っていたのか思いつくままお話しします。

私が数学に興味をもつようになったのは、三歳上の兄の影響だと思います。昭和三十年代の子供たちの間で流行っていた鉄道模型やラジオ製作を兄もやっていて、弟としてはそれが憧れの的でした。やがて兄が買ってきた「不思議の国のトムキンス」や数学パズルの本を覗くと、面白いことが詰まった世界を垣間見るように思えたものです。マーチン・ガードナーの「現代の娯楽数学」という本（サイエンティフィックアメリカンの連載記事をまとめたもの）など、話題はかなり高級で当時は半分も理解できていなかったはずですが、ただ第1章の「オリガミ六角形」というのは自分で何度作ってみても飽きない不思議なものでした。兄は九大で数学の修士号をとってからコンピュータ関連の仕事に就きました。先年、癌に冒されて死期が迫っていた兄に会いにいったとき、書棚にあった昔の本を見ながら子供時代の思い出話にふけたものでした。絵に描いたような理系人間で日頃は無口だったのが、そのときは奇妙に話が弾んだものでした。葬儀が終わったとき形見として取ってもらってきた古ぼけたガードナーの本は今、私の書棚に並んでいます。

中学校のとき、やはり初等幾何が好きでした。円周角の話のとき、黒板にフリーハンドで円を描く技を教わりました。黒板に斜に構えて一気呵成にチョークを振るうというのです。大して上手くなったわけではありませんが、後に自分が教師になり黒板の前に立って図を描くたびにその先生（お名前が思い出せない）の面影が頭の片隅を横切ります。

高校2年生のある日、本屋の店頭で「現代数学」という雑誌を目にしました。その頃（1968年5月）創刊されたばかりのこの雑誌は大学生向けで、本屋に行くたび立ち読みしていたのですが、妙に惹きつけられるものがあって、生意気にも買って帰ることにしました。冷たい教科書の書きかたとは違って、砕けた語り口で話が進んで行くので自分でもなんとか理解できそうな気になってくるのです。執筆者のうちには、森毅、笠原皓司、小針明宏といった京大教養部の異彩を放つ数学者のお名前が見られます。この雑誌は九州の片隅から大学の数学の息吹を感じ取る窓だったのです。私が京大に行こうと思ったのはこの雑誌のおかげということになります。さて京大に来て、実際の講義に出て見ると森先生も

笠原先生も文章ほどには饒舌ではないということがわかりました。ただ小針先生は1971年に亡くなっています。講義をのぞきに行く気があれば行けたはずですが、その機会を逃がしてしまったのは心残りです。（「確率・統計入門」に広中先生による序文があり小針さんとの交友が描かれています。京都駅に座り込んでいる二人の姿は印象的です。）

「現代数学」に話を戻しますが、創刊当時から連載されていた記事のうち森先生の解析講座は「現代の古典解析」として、笠原先生の代数・幾何は「線型代数と固有値問題—スペクトル分解を中心に」として出版されています。後に教養部で授業をするようになってからも、この本には随分助けられました。線形変換の一般固有空間の射影行列を用いた取り扱いは笠原先生のこのときの記事を嚆矢とするのではないのでしょうか。教養部の数学教育のなかで、当時は線形代数学の扱いが様変わりを遂げようとしていた時期だろうと思います。私の1回生の時の数学2の教科書は、小松醇郎・永田雅宜著「代数学と幾何学」で、目次は第1章三次元ユークリッド空間、第2章行列、第3章行列式、第4章整式と方程式、第5章二次曲面となっています。現今の線形代数の講義であれば教科書は「線形代数学」で、話の主演としてベクトル空間と線形写像が活躍することになるのと比べると違いが感じられます。もっとも私たちのクラスの数学2の担当は永田先生で、もっと過激(?)に行列式のところはグラスマン代数の話から入るので大変でした。

1970年に入学して1か月は授業がなく、その後もストがしょっちゅうありました。講義が始まっても、真面目に出ていたとは実は言えません。ただ、自主ゼミには出ていました。教養部構内のプレハブの自主ゼミ用の部屋があって、そこでフランダースの「微分形式」の本を読むのを滝沢精二先生に見ていただいたこともありました。講義よりも自主ゼミで勉強したことの方が多かったように思います。

函数論を面白いと思ったのは、吉田洋一「函数論」(岩波全書)の談話調の文体に引き込まれていったときでしょうか。それから3回生の時に西野利雄先生の講義に出ていたときでしょうか。数学教室の第三講義室(今の110講義室)で西野先生が黒板消しを左手にぶらぶらさせながら、黒板に薄い字で書いていく、そして京都弁の独特の語り口でした。講義を聞いて理解したような気にはなるのですが、実はまだわかっていない。定義・命題・証明と進める隙のない講義というわけではありません。これは後から、図書館で辻正次「函数論」を読んで間を埋めていました。私は講義を聞いてノートをとるのが不得意なので、話を聞いて分かった気になる方があっていただけののかもしれません。

こんな流れで4回生の講究では西野先生のところに行きました。講究で読んだのはL.BersのSeveral Complex Variablesという石板刷の講義録でした。一変数函数論の基本的定理さえ知っていれば、そこから2変数の場合の意外な性質が出てくるといのは新鮮な驚きでした。セミナーの時、西野先生が「先生はこう言うてはったんやわあ」と口癖のように言われるのをよく聞いたものです。セミナーで一緒だった西村保一郎さんに「先生って誰の事？」と尋ねると、彼は目を丸くして「岡先生だよ」。きっと「おまえはそれも知らずにここに来ているのか！」と言いたかったのでしょう。このベアスの講義録の序文にも、これは本質的に岡の仕事の報告であると書いてあったのですが、西野先生が岡先生の一番弟子だということには結びついていなかったのです。楠幸男先生の「函数論」という大著が完成して出版されたのもその頃でした。楠先生の講究で谷口雅彦さんたちがこの本を読んでいたのにオブザーバーとして出ていました。

修士課程に入ってH. グラウエルトの複素空間(Komplexe Räume)という論文を西村さんと読みました。西村さんとは大学院の間ずっと一緒にセミナーなど行動を共にしてい

ました。この論文は、今考えても、修士課程でいきなり読むには難しすぎますが、何とか最後まで辿りついたのは二人でやっていたおかげでしょう。この時には想像もしていなかったのですが、この論文を勉強して解析的分岐被覆面の議論に慣れていたのが、後に複素射影空間の写像の話に役立つことになります。



京都多変数函数論セミナー
後列右から4人目 西野先生 前列左端 筆者

修士課程のとき西野先生は1年間フランスに行っておられたので、その間寺田俊明先生にセミナーを見ていただきました。読んだのは西野先生のその頃の一連の論文でした。“Nouvelles recherches sur les fonctions entieres de plusieurs variables complexes”というタイトルで(I)から(V)まで出ています。これはGrauertの論文とは相当趣が違います。2変数整函数の定数面の既約成分(これを素面と呼んだ)が開リーマン面としてどんな型であるか、またこの素面たちがどんな並び方をしているかというのが、この研究の問題意識ということになります。2変数整函数の素面がすべて複素直線と解析的同値ならば、この整函数は座標を取り換えると1変数整函数に帰着するというのは第II論文の主結果です。また、第I論文では多項式の場合と異なり、これら素面が開リーマン面として大きな境界を持ちうること、また複雑な並び方が起こりうるという例が挙げられています。数学の定理をくつきりと意味づけるためには、それが適用される例と、有効範囲を示す反例が役に立ちますが、その好例と言えそうです。その例・反例をつくるのに役立っているのがファトゥー-ビーベルバッハ領域(FB領域と略す)というものでした。これは2次元以上の場合、 C^n の真部分領域であって C^n 自身と解析的に同型な領域です。1次元の場合には複素平面の真部分領域が複素平面と等角同値になることは決してないので多変数の場合に初めて現れる現象です。最初これを見たときは「病的な反例」だと思っていたのですが、やがてこれはごく普通の現象だと思えるようになりました。

博士課程に進学してからは、西野先生が九州大学に移られたので実質的な指導は教養部の武内章先生になりました。武内先生からは論文の書き方について大変懇切に指導をしていただきました。読者の立場に立って、書き手の一人合点に陥らないよう議論を進めるという教えはこの時に心に沁みつきました

大学院時代、見渡す限り島影もない大海を漂っているような心持でした。今にして考えれば将来の見通しもなく我が事ではあるが一体どうするつもりだったのだろうと思え

ます。西野先生の整函数の話に関連して、スタイン多様体とそのコンパクト化の例を考えているうちにできたのが、2次元複素多様体の中のコンパクトな複素曲線の近傍の性質を調べるといふ話で、これでひと息ついた気がしました。

岡先生が亡くなったのは1978年3月1日で、私は博士課程2年目が終わろうとしているころでした。これはずっと後になって気づいたことですが、この18日後 Gaston Julia が85歳で亡くなっています。

西野先生、武内先生を中心とした岡先生のお弟子さんたちによって、岡先生の残された原稿の整理が始められました。(私は「孫弟子」なのでこの中には入っていません) これは『岡潔先生遺稿集』として第一集(1980年)から第七集(1983年)までにまとめられました。現在は奈良女子大学図書館のホームページ「岡潔文庫」で見ることができます。特に Rappelée du Printemps などはフランス留学時代の思い出が綴られた密度の高い文章です。

遺稿集を読んでみると、岡先生の数学の見方は「数学は人間の心の中にある主観的な存在ではあるが、自然界が存在しているのと同じように確固として存在している。数学の論文も講義も心の中にあるその存在をきめ細かく観察し描写するものでなくてはならない。」という風に言い表せそうです。そうしてみると西野先生の講義スタイルはこの考えを体現したものであったかもしれません。私自身が教壇に立つようになって、函数論の講義も何度となく担当しましたが、なかなか満足いくようにはできません。細部にわたって正確でしかも全体像を彷彿とさせる講義を一度はしてみたいと思っていました。ついに果たせませんでした。

さて遺稿の中でも私にとって感慨があるのは、“Fonctions algébriques permutables avec une fonction rationnelle non-linéaire” (非線形有理函数と可換な代数函数) という原稿です。ジュリアは1変数の有理函数のイテレーション(反復合成)に関する仕事で有名ですが、彼はこの応用として、交換可能な有理函数の組に関する論文を書いています。上に挙げた岡先生の原稿はこれを、有理函数と代数函数の組に拡張したものです。これは岡先生がフランスの G. Julia のもとに留学した時の、初めの時期に書き上げられたもので、岡先生自身が次のように語っています。

「これが数学で私のした初めての仕事なのだが、タイプライターに打ったのを紫のリボンで閉じたまま保存してある。フランスで発表するばかりになったとき、急にまだ意に満たない点が残っているような気がして、そのまま持って帰って今日まで捨ててあったのである。」 「独創とは何か」(エッセイ集「紫の火花」(1965)所収)より

私にとってヒントになったのはこの次の一節でした。

「函数の特別な性質を調べる問題を取り扱っているのであるが、私は近ごろ、この問題の周辺を、次元を上げてよく探索してみたい気持ちになっている。」

これがイテレーションの話が多変数でやってみようと思ったきっかけになりました。多変数函数論をやっているだから当然の話ではないかと言われそうですが、後から考えると当然のことも、その時には気づかないという場合もあるものです。実際 Fatou-Julia の1変数有理函数のイテレーションの話が多変数化すれば複素射影空間の上の正則写像を考えることになるのは当然の話ですが、そのときには射影空間には考えが行きませんでした。

考えたのはFB領域の類似でした。 C^2 の正則自己同形写像のイテレーションによって吸引不動点に収束する点全体がFB領域になるのですが、この吸引不動点が半吸引的不動点に退化した場合にもFB領域ができるという結果です。イテレーションの話が複素力学系として新たに脚光を浴び始めたことを知ったのはもう少し後のことでした。

こうして思い返してみると、私の通ってきた道もいろいろな偶然や巡りあわせによって決まってきたことに改めて気付かされます。そして、ささやかながらも数学の研究を続けてきた原動力は、小さい頃、最初に数学に触れたときの不思議さに満ちた感覚だったと思います。

京都大学教授に就任して

ごあいさつ

教授 日野正訓
(平成5年学部卒業)

昨年4月に京大数学教室に着任した日野です。新任教員として何か寄稿してほしいと依頼されたため、学生時代のことを思い出しながら自己紹介も兼ねて文を綴ってみます。

京大数学教室には学生として学部から博士後期課程までの9年間、および数学教室の助手として2ヶ月間お世話になり、京大情報学研究科に移籍後は理学部兼担として15年間間接的に関わりがありました。その後大阪大学基礎工学研究科に3年間在籍したのち、京都大学に戻ってきたこととなります。専門分野は確率論で、学生時代は渡辺信三先生と重川一郎先生に主に指導を受けました。もともとは無限次元空間上の確率解析を研究テーマにしていたのですが、情報学研究科時代にフラクタル上の解析にも取り組み出し、大阪大学時代にはランダムグラフといったいわゆる離散確率論の分野にも手を伸ばし始め、現在に至っています。

私が大学生・大学院生だった頃というのは平成一桁の年代で、大昔というほどではありませんが、教室にはまだガスストーブが設置されており、数学図書室は3階にあって、中庭にはプレハブ院生室が建っていた時期です。コンピュータやインターネットの環境が整備されはじめ、勉学・研究のための情報収集方法ががらりと変わる過渡期でした。文献を探すためにMathematical Reviewsの分厚い冊子体を1ページずつ捲っていたのが、データの入った数枚組のCDROMを図書室で借りてパソコン上で検索できるようになったことに喜び、そのうちインターネット上で自在に検索が行えるようになり、という変遷を大学院生時に経験したのは幸運でした。当時は良い計算機環境が大学以外に身近になく、電子メールの送受信や論文執筆のために、学生も利用できる計算機室によく出入りしていたものです。慣れとは怖いもので、現在当たり前のように感じている環境は少し前まで全く存在しなかったことをつい忘れそうになります。

学部生の頃は、将来のことをあまり考えずにとりあえず数学に取り組んでみるかという姿勢でした。抽象的な数学の概念について深い理解になかなか至らないまま勉強していたことも多かったように思います。学生有志が作成した授業紹介冊子に寄せられたどなたかの先生の文章で、抽象概念をすんなり理解する人もいれば時間がかかる人もいる、人それぞれなのだからすぐ理解できなくても落胆せずに気長にやっていたら分かる時が来るさという主旨の一文があり、慰められたことを覚えています。学部時代の自主ゼミではいろいろな先生方や先輩方・同期にお世話になり、今から思えば大変恵まれた環境でした。学部3, 4回生の頃は、バブル経済が崩壊したとはいえ企業からの案内パンフレットが段ボール箱

にぎっしりと詰められて自宅に送られてくるような、まだ威勢のよい時期です。学部卒で就職するか、大学院に進むかで幾分迷いました。修士課程修了後は企業等への就職や内部進学、他大学の博士後期課程に進むなどいろいろ選択肢があるのだよという助言を専門分野の違う方からいただき、もう少しモラトリアムして先に進んでみても何とかなるかという判断をしたのが人生の一つの分岐点でした。今振り返ってみると結果オーライの側面が大きいのですが、それなりに自分の中での紆余曲折と巡り合わせがあり、縁遠かったアカデミックの世界に至ったこととなります。

時は流れ、現在大学教員として教育・研究・運営に携わっていると、学生時とは違った視点から見えてくるものもあります。また、近年は学生へのサポートも手厚くなり、レポート課題や中間試験、質問受付等のアフターケアなど、教員側も随分と労力をかけるようになりました。Pay it forward の精神で、時間をかけて授業等の資料を作ったりするものの、効果が目に見えては現れないなと思うこともあります。教育というのは本来そういうもので長期的な観点で考えるべきものなのでしょう。いま学生の方が数年後か数十年後に社会の主要な地位についたとき、数学教育や数学研究に対して適切で好意的な見解を持ってもらえば有り難いという気持ちでおります。

学部を卒業して

楽しい授業

諸山 将梧

2017年3月学部卒業

私にとって大学は勉強のペースメーカーでした。普段は学校に行かずに漫画を読むこと、ネットでちょっと面白いページを探すこと、昼寝に時間を費やしていました。そして、期末試験前になると急いで内容を半分ほど詰め込むのです。そしてその翌学期にこれではいかんと前学期の内容を一日中勉強するというのを二科目分ほど行い、燃え尽きて、またもとのだらけた生活に戻るといふのを繰り返していました。

しかし三回生になるとそうもいかない科目が現れました。解析学演義、幾何学演義、代数学演義です。これらは問題を黒板の前で解く科目です。また、これは前期の科目で、後期にもある演義の内容の選択にここでの成績が関わってくるため、けっこうな高頻度で発表をする必要がありました。しかしこの演義こそが、私の思う一番楽しかった授業です。

システムとしては、問題が大量に配られて、各々勝手に解き、それを黒板で発表するというものでした。解いた問題が被った場合はじゃんけんで誰が発表するか決めるということになっていました。しかしそれではせっかく時間をかけて解いた問題が発表できないということが多発してしまうため、誰がどの問題を解いているかを共有することになりました。

その方法は、Google スプレッドシートというものを使って、ネット上のエクセルのようなファイルに各々が記入していくというものでした。リアルタイムで書き換えが見えるので、多くの人数が同時に編集しているときなどじんわりとした一体感を感じました。また、ちょっとした相談などもそこに書き込まれていて、これも便所の落書きで会話しているのを眺めているのに似た楽しさがありました。

さらに運がいいことに、私の学年には場に合わせないムードメーカーがいたので、少人数の授業というのも相まって笑いが生まれていました。代数学演義では、その空気に途中で慣れたのか、尾高先生が笑いをとりにいつている光景も見ました。

これから演義を受ける学生にとっても演義が楽しい思い出になることを祈ります。



代数学演義が行われた教室

修士課程を修了して

数学と私

川口澄恵

2017年3月修士課程修了

私は平成23年4月に京都大学理学部に入学した。入学したときは学科ごとに分かれておらず理学部としての入学だったが、当時から数学科を希望することは決めていた。高校生とき、数学の問題が解けることが楽しいと思ったところから始まり、自分で考えた関数がどのようなものなのかを考えたり、先生に ϵ - δ 論法を教えていただき、大学でも数学を学びたいと思ったからである。

大学1年の前期の数学の授業は微積分学と線形代数学であった。微積分学は國府先生が見てくださり、 ϵ - δ 論法は慣れていたこともあって、初回の授業を受けた感想は「理解できるし楽しい」であった。一方、線形代数学は山崎先生が見てくださっていたのだが、「これが大学の授業か…！」と驚いた。その後大学の環境に慣れると、(今となっては後悔しているのだが、)出席を取られる授業といくつかの授業以外出ずに塾講師のアルバイトの時間以外ほぼ引きこもり状態になってしまった。

研究内容を選ぶ上でとても大きな影響を受けたのは、2回生後期に受けた非線形数学セミナーであった。微積の授業でお世話になった國府先生が少人数セミナーをすると聞き受けることにしたのだが、やはりセミナーは授業とは違い、受け身では参加できないため予習に時間を要し少しは思考力が身についたように感じた。先生や共にセミナーを受けていた友人は本当に頭が良い上に人格も素晴らしく、私にわからないことがあれば優しくわかりやすい説明をしてくださった。頭を使うことは楽しく、また人格的に素晴らしい人からもっと学びたいと思った。

3回生のときのコアの授業で演習を考えていて4回生の講究は代数にしようかと思っていたのだが、結局國府先生に学びたいと思い、応用数学に進んだ。洋書を読むのは初めてでなかなか進まなかったのだが、先生と1対1でセミナーをしていただけたので、自分のペースで学ぶことができた。このとき、大学院に進みたいと思っていたが就職の話もあり悩んだ末先生に相談して大学院に進むことに決め、なんとか院試にも合格し、充実した生活が始まった。

大学院生になって大学生の頃から大きく変わったのは、勉強部屋が与えられたことである。同じ部屋のメンバーにはすごく恵まれ、勉強もするし遊びもする



M1のときのクリスマス会

毎日で、引きこもりがちだった大学生時代からは想像できないほど毎日大学に来た。勉強は、先生に見ていただく院生セミナー以外に、大学で学んで来たはずの内容を復習することを目的とした復習セミナーをして、環論やフーリエ変換を学んだ。遊びは、クリスマス会や土砂降りの中の野球大会や事務の方を交えた女子会やサイクリングをしていた。(遊ぶことの方が中心になってしまっていたかもしれないが) 学ぶことも遊ぶこともできる環境は、本当に幸せだったと感じている。

大学院で得たものの中でもっとも大きかったのは友人だと思う。現在私は中学生の頃から夢見ていた教員をしている。友人らは同じく教員になった人も研究を続けている人も企業に就職した人もいる。教員になった友人と数学や教育の話をしてちょっとずつ成長しているように感じるし、私自身は憧れていた「数学のできる先生」には程遠いが、数年後に研究を続けている友人や企業に就職した友人らを学校に招いて最先端の数学や社会で使われている数学を生徒に触れさせてあげられると思っている。数学に面白さを感じられなかったこともあるが、数学のおかげで学ぶことの楽しさを感じられたし、良き友人にも出会えたし、前向きに教員をできていると思う。数学教師として謙虚に学びながら、生徒に数学の面白さを伝えていきたい。

数学教室の先生方や事務の方には大変お世話になりました。ありがとうございました。数年後に生徒をお送りする予定ですので、よろしく願います(笑)



卒業旅行（大宰府）

京都数学同窓会への寄付者氏名（敬称略）

感謝してご報告いたします。

2016年7月1日より2017年6月30日までのご寄付（受付順）

複数回に亘って寄付くださった場合はその都度名前を記している。

田中 紀子	重川 一郎	森 重文	森住 弘	篠崎 由加里
山崎 喜代志	山崎 泰郎	藪内 健三	坂本 礼子	伊東 由文
宮西 正宜	猪倉 清	牧野 哲	奥田 武治郎	栗山 晃
岡田 正巳	藤井 光昭	梅原 純一	松本 雅博	辻井 芳樹
松井 邦光	大沢 健夫	笠原 勇二	西崎 真也	長田 博文
柴原 節男	渡辺 信三	浅倉 史興	国原 惇一郎	小田 忠雄
金村 慶二	蓮井 敏	淀川 高喜	井上 茂	中尾 慎宏
齊藤 雅子	亀井 清	小嶋 勝	宮嶋 公夫	神田 護
占部 博信	吉岡 嘉暁	酒井 博敬	佐々木 健次	橋本 光靖
入江 幸右衛門	泉 脩蔵	平野 徹	田中 武二	吉田 大悟
佐井 義和	石丸 裕吾	辰馬 伸彦	徳田 裕也	山口 明範
佐々木 政治	大平 坦	神保 道夫	石井 亮	平井 武
池田 世紀男	河合 貴代子	西谷 達雄	島田 三郎	浅井 清
竹井 義次	望月 拓郎	太田 稔	林 良昭	上坂 洋司
大野 一成	阿賀岡 芳夫	中邨 良和	中山 素生	相川 弘明
津島 淳一郎	我妻 佳祐	川平 友規	中村 永	泊 昌孝
森山 光彦	樋口 保成	三木 悠平	荒川 浩明	糸井 隆右
米谷 文男	笹谷 文雄	正岡 弘照	大嶋 孝造	井川 満
北條 俊一	塚本 千秋	三ツ矢恵治(和弘)	桑門 正美	奥田 寛
藤田 宗孝	鶴 敏朗	畑 聡	西田 孝明	佐藤 裕亮
北村 眞一	黒田 和孝	土川 眞夫	長井 英生	石原 徹
能見 勇八郎	松本 和一郎	亀井 真人	植田 隆巳	須川 敏幸
熊谷 隆	楠 幸男	三輪 雅	菅原 邦雄	伊藤 宏
辻 幹雄	桑垣 煥	中山 博人	藤野 康弘	山口 睦
宇野 敏満	寺阪 元之	川口 京子	広中 平祐	渡井 啓夫
山本 泉二	伊藤 祐志	小川 亘	岸本 展	三木 良一
塩田 隆比呂	亀井 清	中山 素生	福山 克司	渡邊 坦
樋口 哲弥	山岸 義和	宮川 秀真	藤原 宏志	村岡 徹
長谷川 幸子	竹内 和也	藤原 克志	上柿 一輝	堀永 周司
川口 澄恵	松宮 隆晃	寺井 亮太	高尾 信成	鈴木 綜馬
松本 岳大	植田 優基	上妻 玲兒	山口 浩平	野中 翼
矢嶋 修伍	西尾 優	池 航平	橋 由佑子	山根 郁太郎
櫻井 涼	廣江 泰英	諸山 将梧	井上 大雅	梶原 雅史
越智 諒	大西 智也	山戸 康祐	坂上 貴之	中山 素生
小磯 深幸	福田 正人			

以上 172 件， 寄付総額 1,549,000 円

編集後記

当会の会誌編集規則が2016年8月に開催された役員会で制定され、かつ編集委員4名も任命されました。その後、重川一郎編集委員長のもと、正式な同窓会誌の最初の編集が進められ、ほぼ予定時期の発行を見通せる段階に至ったことは、編集委員一同の喜びであります。

昨年11月19日開催の同窓会行事の報告・記録は、本誌がまず収録しなければならぬ事柄であります。ご承知のように、この行事における講演会を広中平祐氏が引き受けてくださり、当日広中氏は「数学者の素願から終活まで」なるタイトルで、一時間半に亘り情熱を込めて語ってくださいました。今回、この講演記録を収録できたことは、本誌創刊に際しての何よりの記念であります。ご多用の中、講演においで下さったばかりでなく、録音を起こしたものに丁寧に手を入れ、また写真等を付け加えて下さって、講演記録を仕上げてくださいました。これらのご労苦に改めて心からお礼を申し上げます。

三木良一氏と松本和一郎氏の準備号、設立記念号と続いてきた連載記事「私の学生時代」の第3回目を載せることが出来たのも感謝であります。太平洋戦争敗戦による日本国組織の根本的変革の時代と、それから約20年後の日本が抱えていた問題の顕在化としての大学紛争の時代を、お二人が夫々に数学教室の学生として生きた夫々の記事は、数学教室の歴史としてのみならず、日本の歴史の一つの記録として貴重な価値を持つと思います。三木氏の海賊版を巡る話は、海賊版を利用させてもらった世代の私にはとても興味深いものであります。

今回は、退職した方や新たに就任した方にも執筆をお願いし、さらに卒業生・修了生の方々にも記事を書いていただきました。編集部からの強引なお願いに応じてくださったことここに感謝申し上げます。なお、懇親会でスピーチ下さった森住弘氏（昭和29年卒）は執筆をお引き受けくださっていましたが、その後に受けた手術後の回復が十分でないため今回は見送りとなりました。速やかな回復を祈ります。

京大数学同窓会会誌がかく出発できた訳ではありますが、これから会自体とともに段々と育てていかねばなりません。編集規則に加えて、編集の具体的基準や内容なども順次整備する必要があります。しかし、会員の皆様からの寄稿は勿論のこと、お知恵や助言などをお寄せくださることが会誌成長の不可欠の養分であります。皆様のご協力をお願いいたします。 (副編集長 井川 満)

数学同窓会 2016年11月19日 写真集



北部構内風景



数学教室



会場案内



『わたしもここで勉強する!』
110 講演室 (旧第3 講義室)



総会受付



総会

広中平祐氏 講演会



講演風景



85才以上の人、手を挙げてみて



講演終了後同窓生と一緒に
(河野裕明氏撮影)

懇親会



渡辺会長挨拶



大塚香代氏の発声で



乾杯



懇談



懇談



懇親会もお開き

2016 年度学位記 授与式



理学部数理科学系卒業者（3月24日）



数学・数理解析専攻数学系修士課程修了者（3月23日）

京都大学理学研究科・理学部数学教室

同窓会誌 創刊号

発行者：京大数学同窓会

606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学研究科数学教室内

<https://www.math.kyoto-u.ac.jp/alumni/>

編集責任者：重川 一郎

印刷・製本：北斗プリント社

606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2

発行年：2017年8月25日

京都大学理学研究科・理学部数学教室
同窓会行事

2017年11月11日(土)

総会受付 13:30~14:00 理学研究科3号館110講演室

総会 14:00~14:30 同上

講演会 15:00~16:30 理学研究科3号館110講演室

講師： 松井充 氏

タイトル：「暗号技術と出会って30年」

懇親会受付 17:00~
(会費8千円)

懇親会 17:30~20:00 京都大学時計台2階国際交流ホールI

